# 新潟県の仕事着

山崎光子
柳平則子

## 一　新潟県（上、中、下越）の仕事着

### (1) 地域の概要と調査地区分

新潟県は本州側の越後と佐渡の島とに文化的にも大きく分かれる。前者は、広い越後平野をもつ米どころとして知られているが、農村地帯のほか、日本海に面した長い海岸線には漁村が点在しており、また、越後山脈をはじめとする山々に囲まれた山村も多い。すなわち、農村・山村・半農半漁村があり、耕作地の少ない人々は出稼ぎなどで生計を補っていた。

新潟県は山形・福島・群馬・長野・富山の五県に隣あい、それぞれの隣接地域との密接なつながりがあって、それが仕事着の上にも反映していたものと思われる。また、沿岸部では海からの交流も深かった。

その地域区分は、一般に上越、中越、下越と大別されているが、ここでは、県北(A)、下越(B)、中越(C)、魚沼(D)、上越(E)と分け、さらに表1のように細区分した（写真には地名のほか（）内にその地域区分を示した）。

調査地域は図1、2、3の結果にみられるとおりである。特に上越など調査不足の地域もある。図3の下衣については、これまでの県の緊急民俗文化財調査の結果も参照して作成した。

### (2) 仕事着の基本型の種類と範囲

仕事着の種類は、収入を得るため、また自家

調査地域区分

| | 地域区分 | | (記号) | 所属する郡・市 |
|---|---|---|---|---|
| 下越地方 | 県北 | (A) | 岩船 (A₁) | 岩船郡・村上市 |
| | | | 北蒲 (A₂) | 新発田市・北蒲原郡・豊栄市 |
| | 下越 | (B) | 東蒲 (B₁) | 東蒲原郡 |
| | | | 新潟・西蒲 (B₂) | 新潟市・西蒲原郡・燕市・白根市 |
| | | | 中蒲 (B₃) | 中蒲原郡・五泉市・新津市 |
| 中越地方 | 中越 | (C) | 南蒲 (C₁) | 加茂市・三条市・南蒲原郡 |
| | | | 長岡 (C₂) | 三島郡・見附市・栃尾市・長岡市 |
| | | | 刈羽 (C₃) | 柏崎市・刈羽郡 |
| | 魚沼 | (D) | 北魚沼 (D₁) | 小千谷市・古志郡・北魚沼郡 |
| | | | 南魚沼 (D₂) | 南魚沼郡 |
| | | | 中魚沼 (D₃) | 十日町市・中魚沼郡 |
| 上越地方 | 上越 | (E) | 東頸 (E₁) | 東頸城郡 |
| | | | 中頸 (E₂) | 中頸城郡・新井市・上越市 |
| | | | 西頸 (E₃) | 西頸城郡・糸魚川 |

用のための田、畑、山、漁、浜仕事や、その収穫物を売り歩く時の仕事着を対象とした。その他の冬期のワラ仕事など、小屋仕事や家の中での仕事の時は長着型の仕事着が多く、常着とまぎらわしくなるのでここではぶいた。出稼ぎ時の仕事着も特殊であるためとりあげない。

衿型、袖型の形状の種類は図1、2の中に表示した。呼称の中にはとりあえず仮につけたものもある。

衿型については、旧来の和服形式の衿を主体とした。洋服形式のボタン止め、テッポ袖の男性用シャツ（紺地細縞など）は県下全域にみられるため分布地図からはぶいた。ハンテン衿も印バンテンや、冬期のワタイレの防寒着に多いためはぶいた。

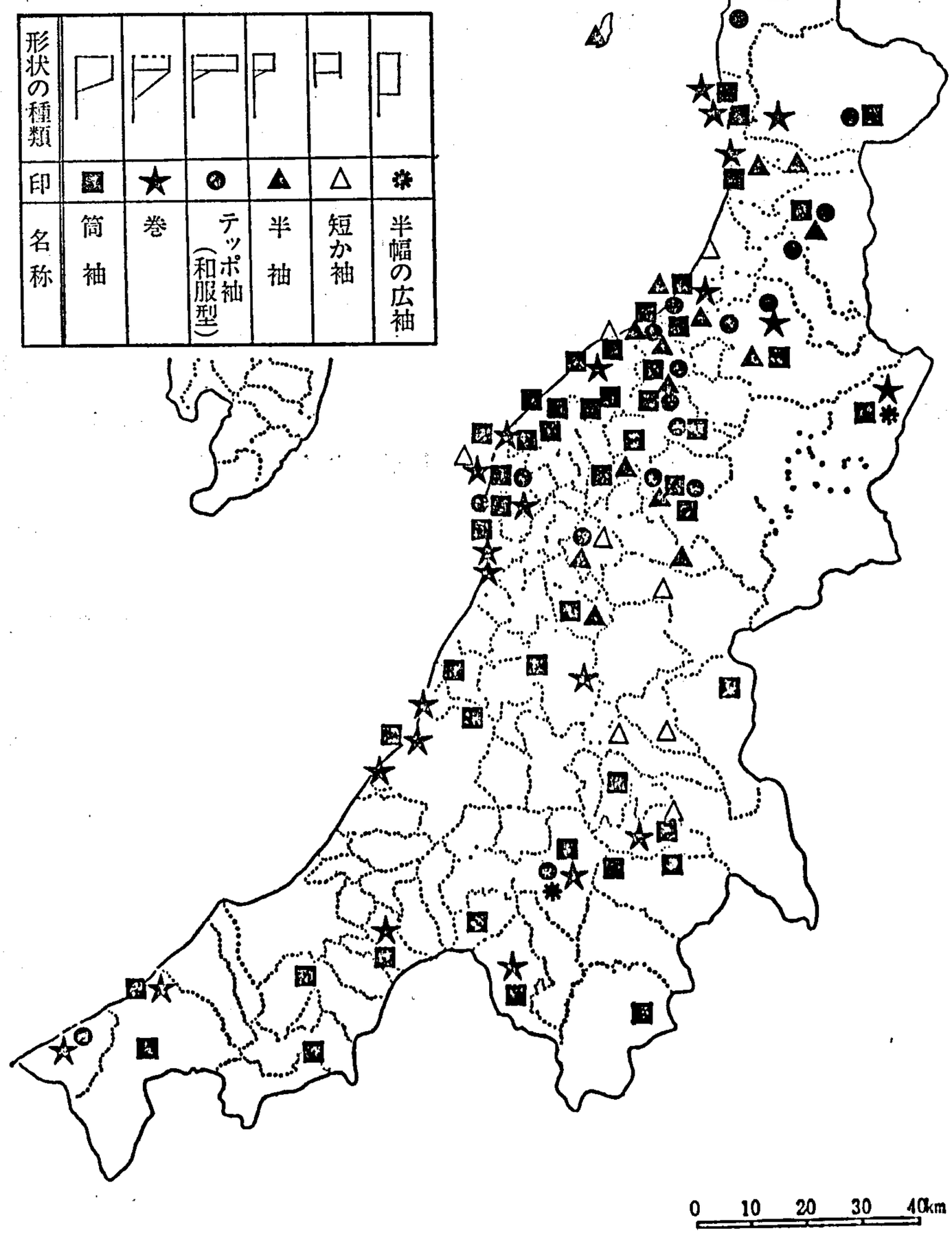


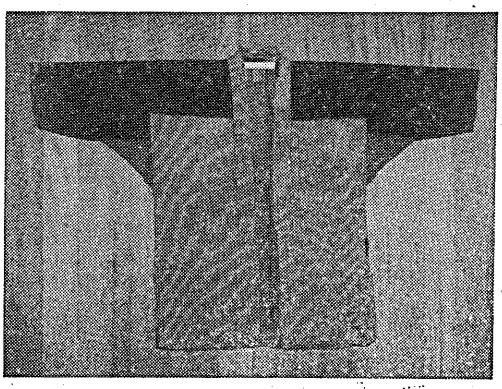

図1　袖型の分布図

袖型については、袂のない袖にかぎった。袖口にゴムを入れた上着（ウワッパリ）も近年一時的に流行したものであるのではぶいた。

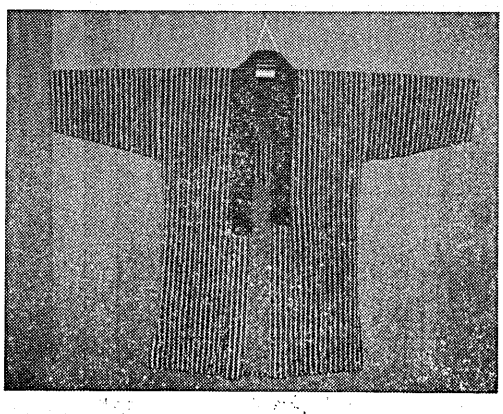
下衣の種類については図3の中で表示した。モンペは昭和十年ごろから全県的に流布したためはぶいた。

対象とした仕事着の着用年代は、昭和初期までとしたが、実際は第二次世界大戦中をはさんで物資の不足した戦後、しばらくまで着用されたものとなる。昭和三十年ごろからの女性用の洋服型の仕事用改良着は煩雑になるため含めなかった。

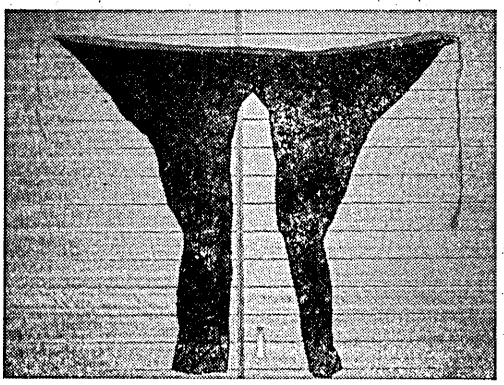
仕事着の男女差は、下衣が男はモモヒキ、女はコシマキであること、男性用が早くから（大正年間）洋服化したことなどがあげられる。色柄は、上衣については性差が明確であるが、衿型や袖型の基本型は同じである（身八つ口や袖の振りの有無など細部は異なるが）ため分布地



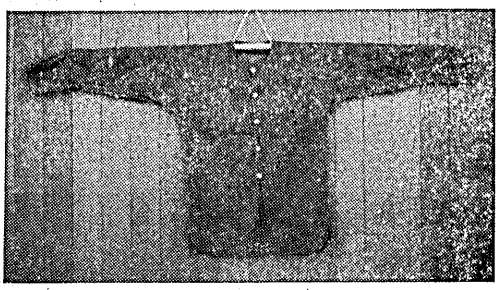
1—4　京ヶ瀬 ($A_2$)



1—1　中ノ小屋 ($B_2$)

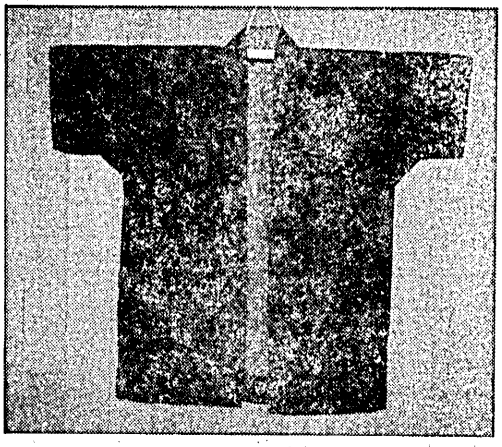


1—5　坂井輪 ($B_2$)



1—2　見附 ($C_2$)

1—6　黒崎 ($B_2$)



1—3　栄 ($C_1$)

図上では一緒にあつかった。着用者の老若の差異も色柄にあらわれるが、形の上での違いは若い人の洋装化が早いことであろう。

## 1　農村の仕事着

新潟県は農業県であり、農村のほか漁村や山村においても耕作面積の大小はあるものの農作業はきり離せない。ここでは中・下越に広がる蒲原平野（西蒲原・中蒲原・南蒲原）の農作業の仕事着を中心にとりあげた。特に下越は低湿田で深田が多く泥にまみれてのきびしい農作業のところが多かった。

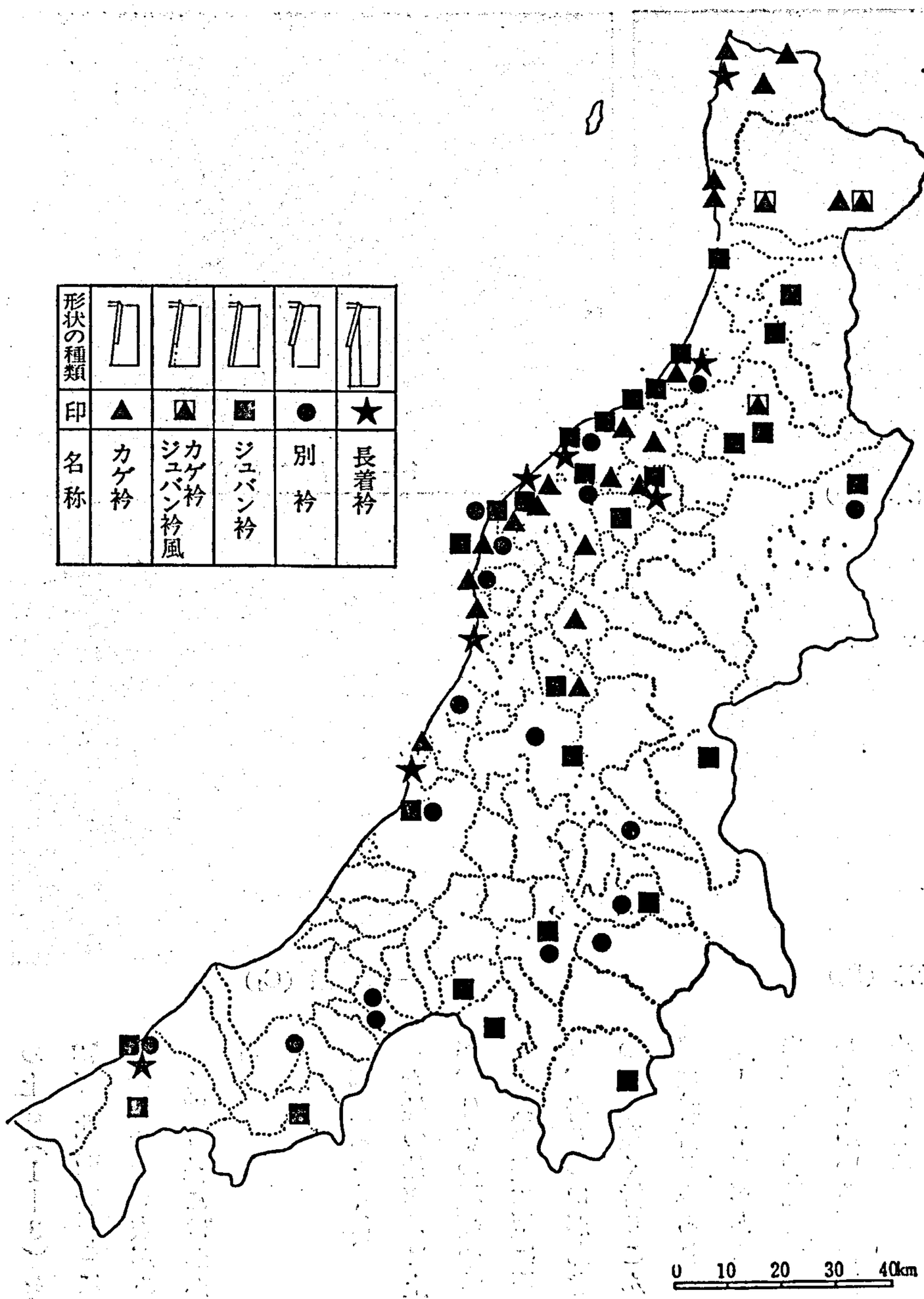


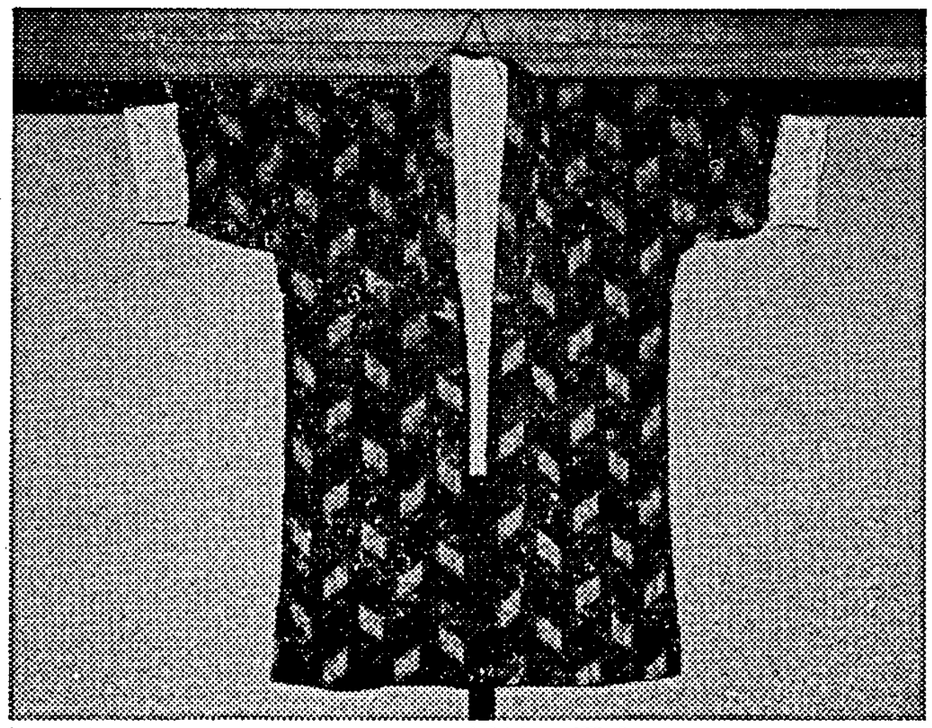

図2　衿型の分布図

### (1)　男の農作業衣

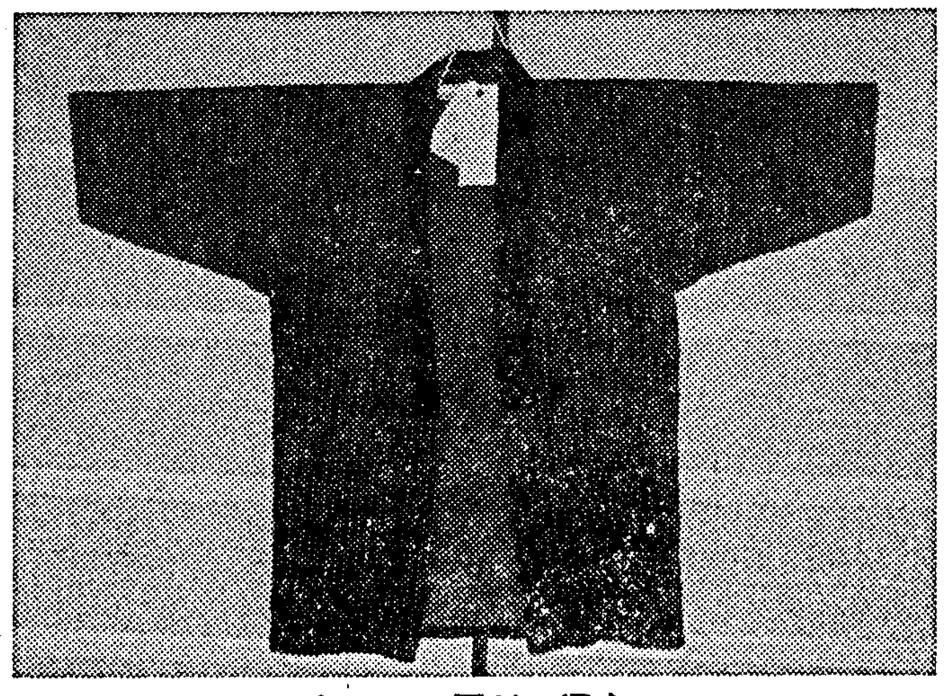
男性の農作業衣は、田仕事・畑仕事にかかわらず、上衣とモモヒキである。上衣の基本型は一般に写真（1—1）（以下、写真については番号のみを数字で（　）内に示す）にみられるような筒袖、ジュバン衿で、下衣には紺のモモヒキ（1—5）を上衣の内側にはき帯（サンジャク）をしめる（1—11）。田仕事のときは男女とも脚をワラで二か所しばる（1—13、14、15）。上衣は紺無地（1—11）か細縞（1—1）で、若いほど縞柄が大きくなる。

男性の仕事着は全県的に早くから洋服化して、シャツ衿、テッポ袖の上衣（1—2）が普及した。やはりモモヒキを上衣の下に（1—12）着用するが、帯はしめない。半モモヒキは（1—12）県内に広く普及していた。

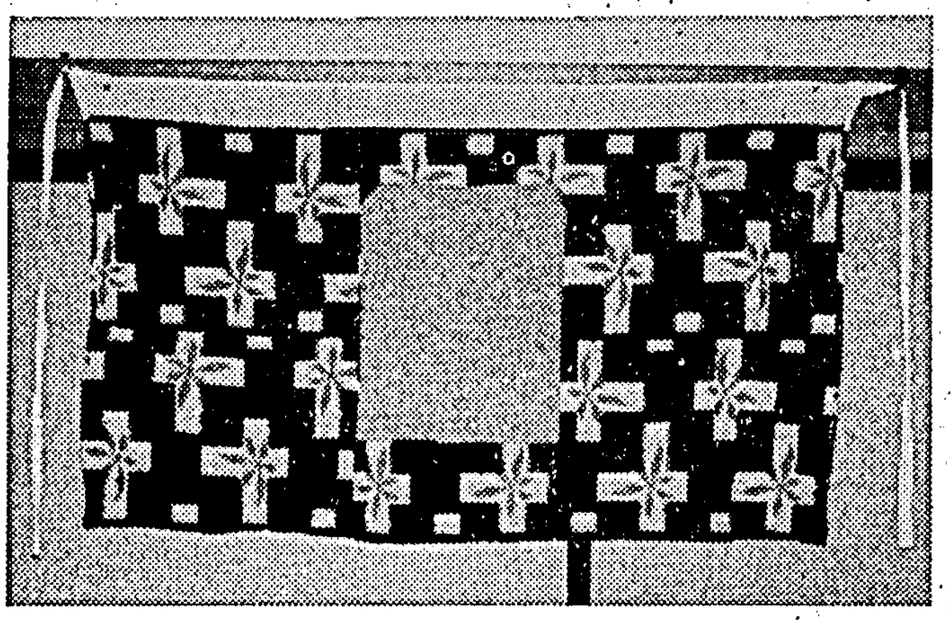
中越以北の蒲原では、春先や秋深く寒くなるとテッポ袖の上に袷仕立ての半袖（マチつき）



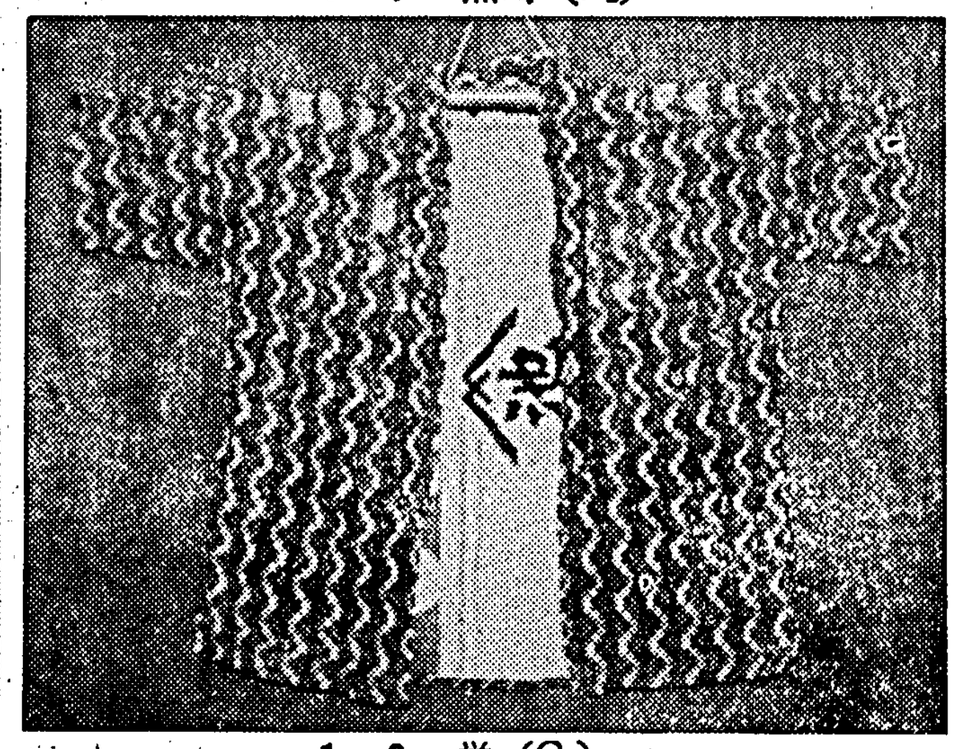
1—9　新津（$B_3$）



1—7　黒崎（$B_2$）



1—10　新津（$B_3$）



1—8　栄（$C_1$）

の上衣（1—3）を重ね着し、さらに袖なしを着るところもある（1—13）。北蒲原などには半袖を大きくしたような筒袖と巻袖の中間的な変り袖のサシコ衣がみられた（1—4）。

衿型は袖にはかかわりなく、県北に行くにしたがってカゲ衿が多くなる。

(2) 女の農作業衣

女性の仕事着は上衣と、下衣はコシマキとモモヒキとモンペであるが、仕事の種類や時代の推移で異なる。

上衣の基本型は筒袖にジュバン衿（1—7）やカゲ衿（1—6）であり、身八つ口があき、振りのあるものが多い。袖の下部を平らにして袖つけを短く折りこんだもの（1—6）も漁村も含めて西蒲原郡、中蒲原郡に時折りみられる。季節にあわせて単仕立て（1—6）や袷仕立て（1—7）がある。南蒲原郡、中蒲原郡では、そのほか夏季用の単物の半袖や、短袖でカゲ衿の上衣（1—8）もある。これに長ゴテを組み合わせて用いる。色柄は紺地の縞か絣で若い人は大柄で年配者になるほど小柄になる。

衿型はジュバン衿のほか、南蒲原郡以北ではカゲ衿も多く、これには身幅の大小や手持ちの用布の量もかかわっている。

下衣はコシマキを上衣の下に巻くが、上衣の裾の下に外部から見えるように下げるため、縞や絣や絞りの柄を配慮して選んでいる（1—10）。

田仕事のときは男性と同様、モモヒキをはくところが多い。その下にコシマキはしめたり、しめなかったり、人によって異なる。田仕事の際

は水田のため前裾が垂れてぬれるので、上にあげて帯などにはさむところもある（1—14）。春秋の寒い季節は、単の上衣の上に袷を重ねて着る（1—15）。田仕事が終わるとモモヒキを脱ぎ、コシマキを下げて帰路につく。

畑仕事のときはコシマキを上衣の下につけ、脚にハバキをつける（1—16）。昭和十年前後からモンペが一斉に流行しはじめ、コシマキに代った（1—17）。山袴も山間部から導入されたが流行する間もなくモンペになった。これらは上衣の上側にはく。下衣の普及もあってか、上衣の身丈は次第に短くなっていた。

また一時期、所によっては、袖口裏に色布をつけたり（1—14）、下着にレースの袖口のついた肌ジュバンを重ねて（1—9）、袖口を折って外に見せるダテな着方（1—17）も流行した。

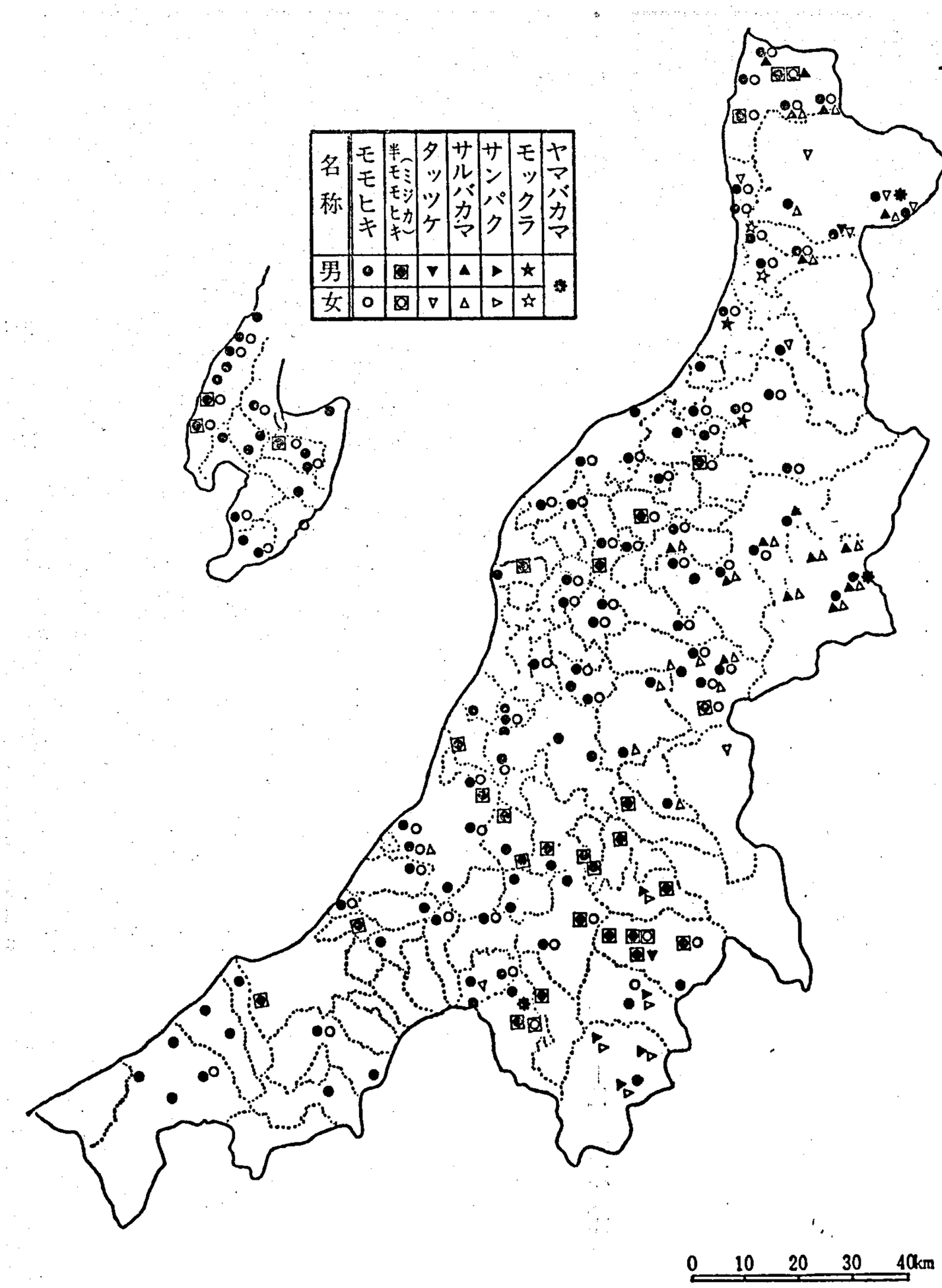
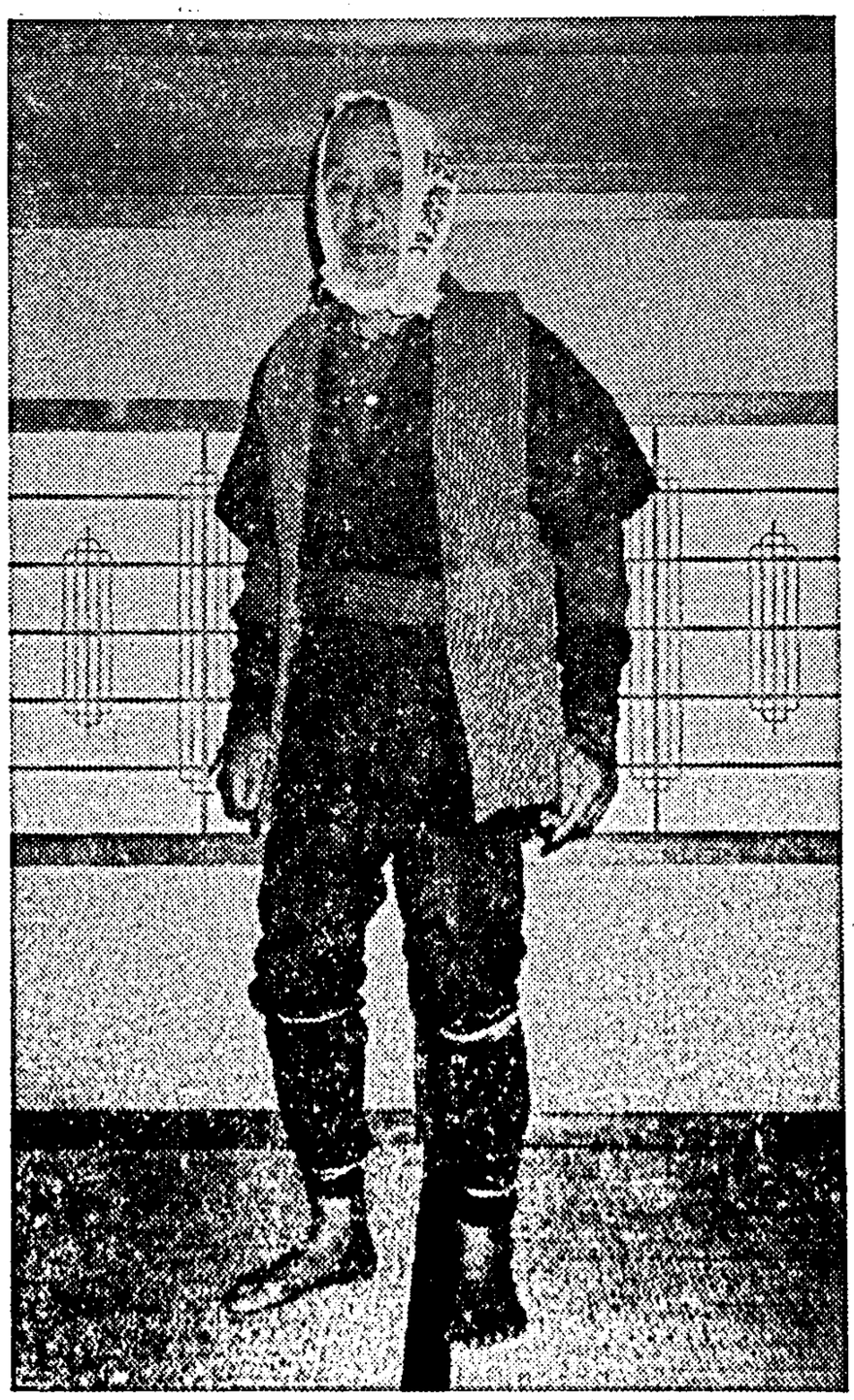


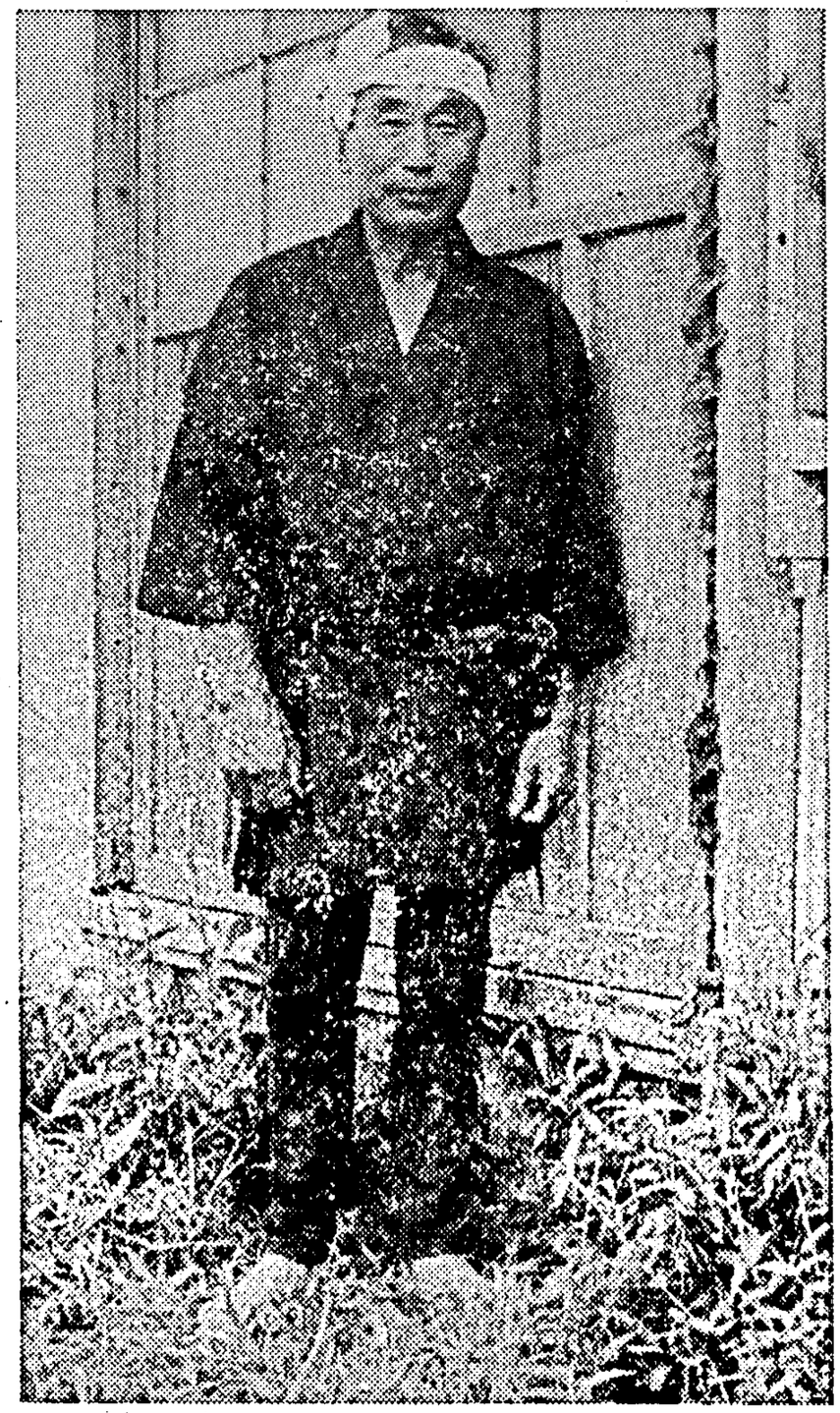

図3　下衣の分布図

仕立て方は、冬の農閑期を利用して嫁入り前に習得した見事な針仕事による単仕立てや袷やワタイレが多く、サシコは農村地帯では、北蒲原郡以南ではあまりみられない。綿から糸をとって機で織り、自家製の仕事着をつくっていたところが多く（1—1）、木綿産地も中・下越にいくつか形成され、衣料が豊富だったためかと思われる。木綿以前は、麻を植えて麻布を織っていたことを語る資料も残っている。そのころは針仕事ではなく、機織り上手が嫁入り条件となったらしいが、それは今の古老たちの孫ばあさんの時代までである。

1—13 栄（$C_1$）

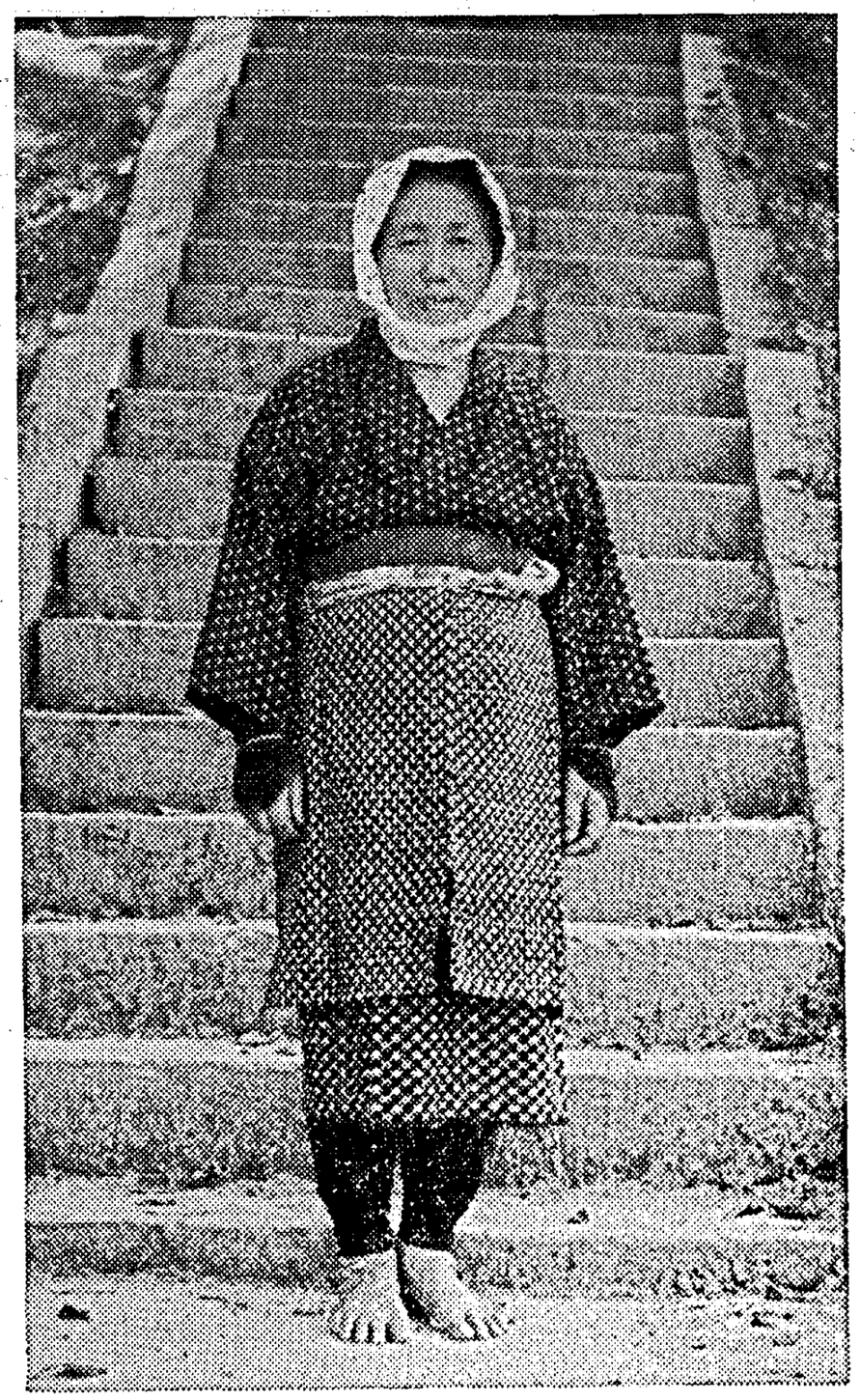


1—11 巻（$B_2$）



1—14 寺泊（$C_2$）

1—12 新津（$B_3$）



1—16　寺泊（$C_2$）

1—15　新津（$B_3$）

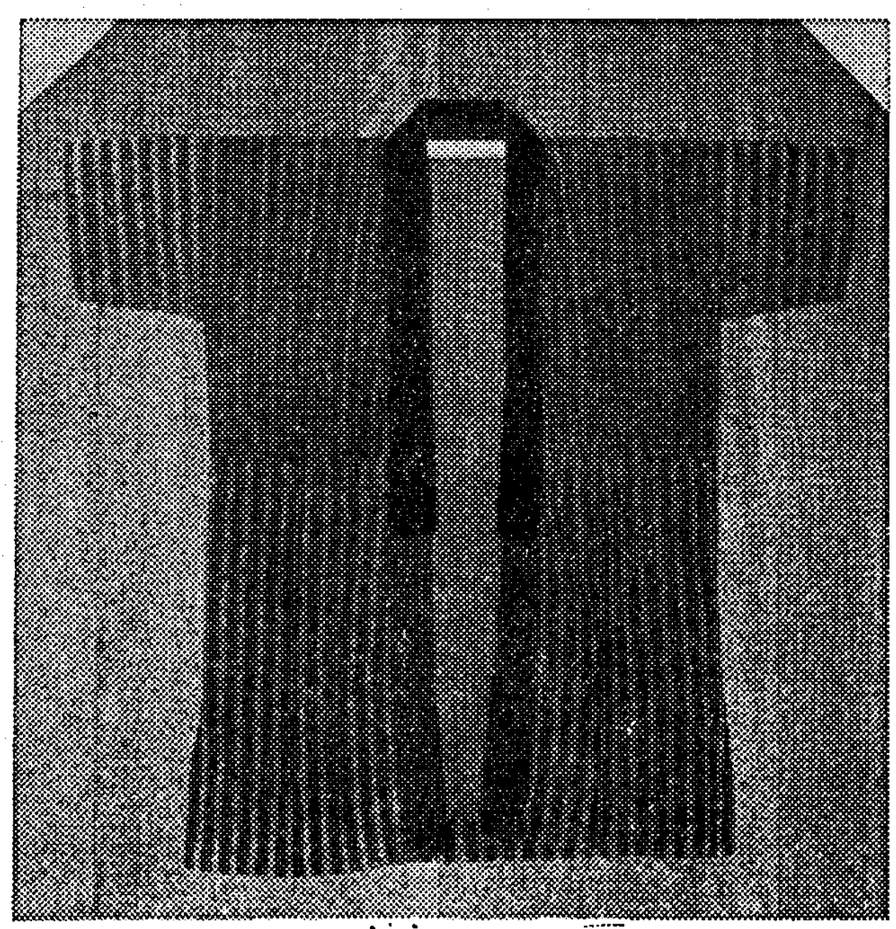
1—17　新津（$B_3$）

## 2　漁村の仕事着

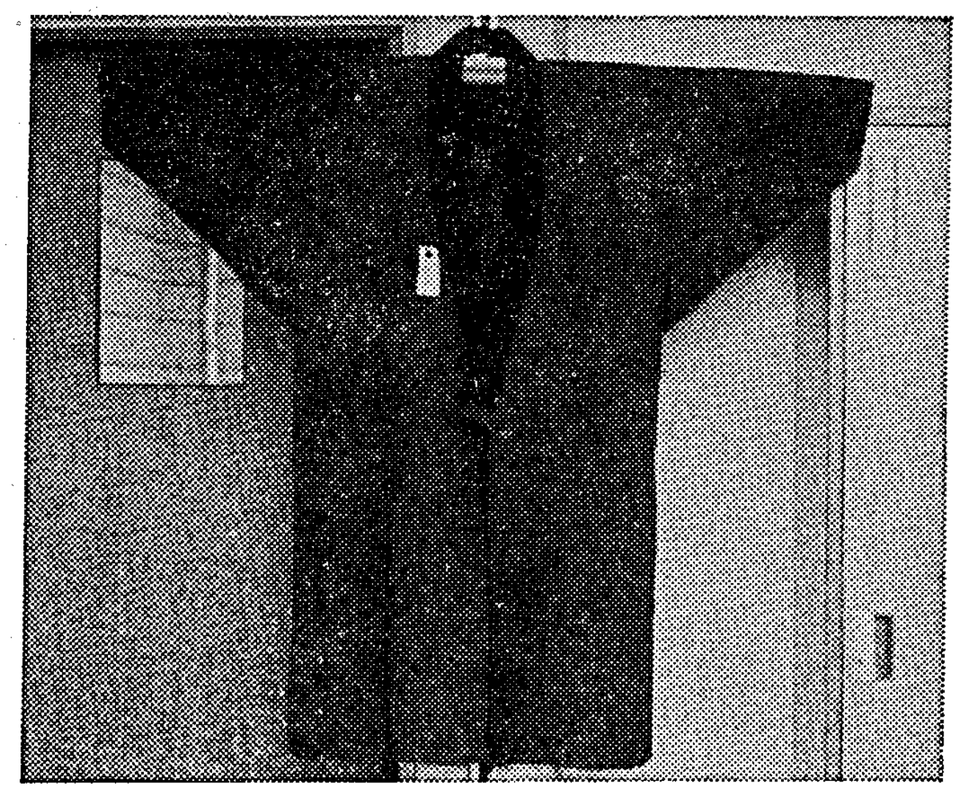
漁村は新潟県の内陸部（魚沼、東蒲原、中蒲原、南蒲原、東頸城）をのぞく沿岸部の長い全域にわたっているため、県北部と県西南部では、明らかに異なる文化圏に属している。特に西蒲原の沿岸部は越前や能登との直接のかかわりがあり、また、全県的に北海道をはじめとする航路による広域的な交流があり、仕事着にも影響を与えている。

### (1)　男の仕事着

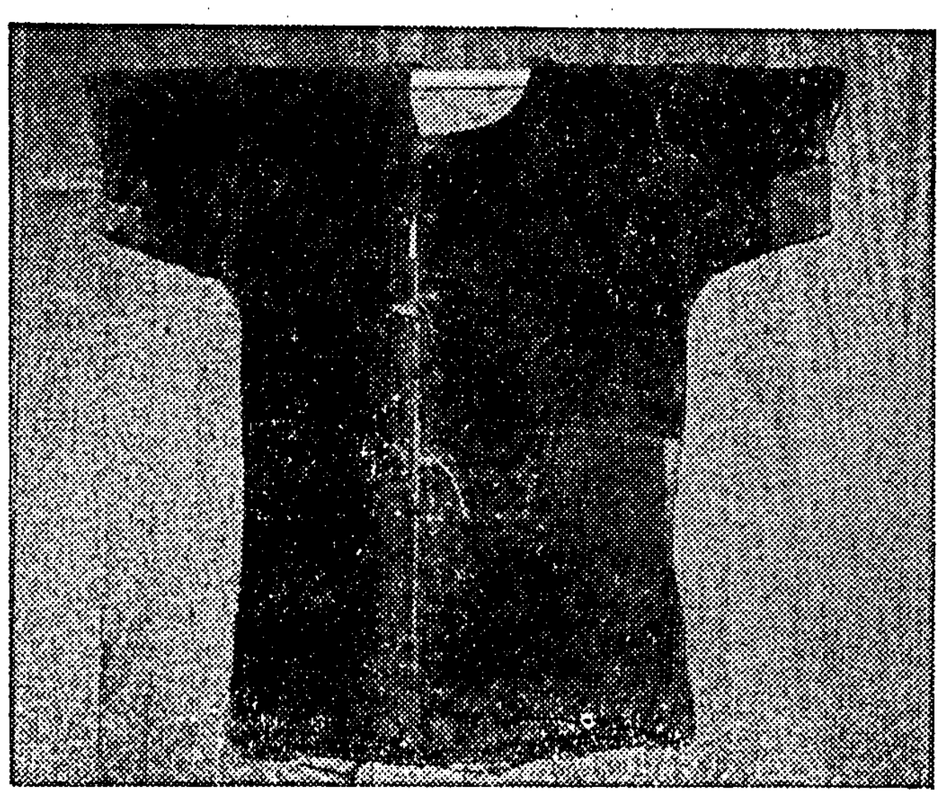
背後に山のせまっている地形が多いため、漁村は漁のほか、山仕事も若干はある。そのほか出稼ぎ（杜氏や大工）などで収入を得ている。



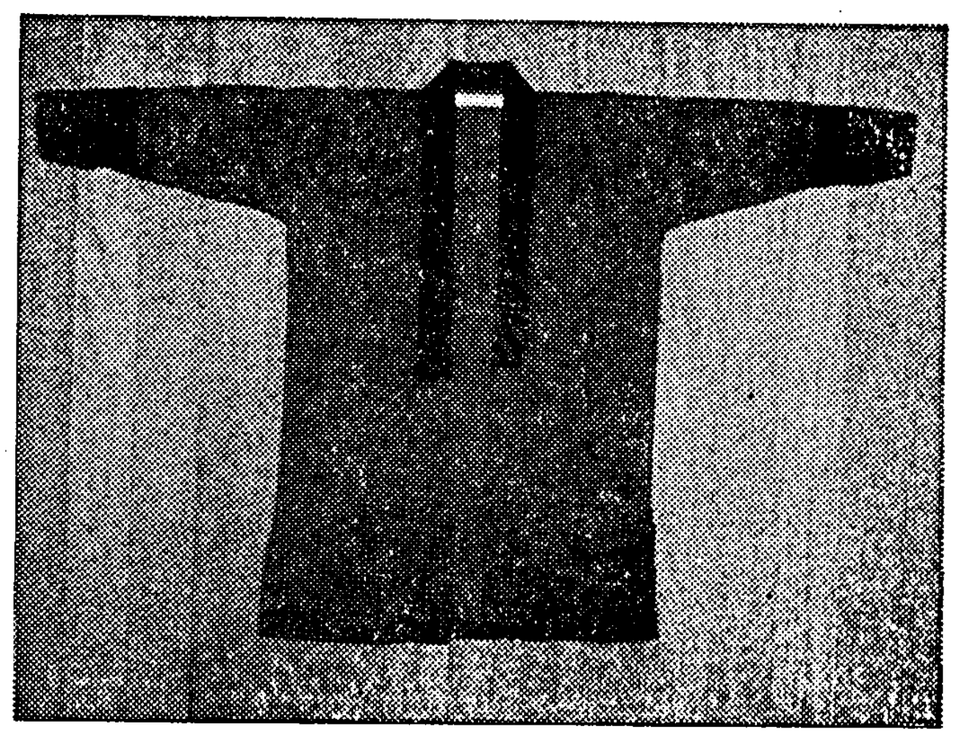
2—3　島見浜（$B_2$）



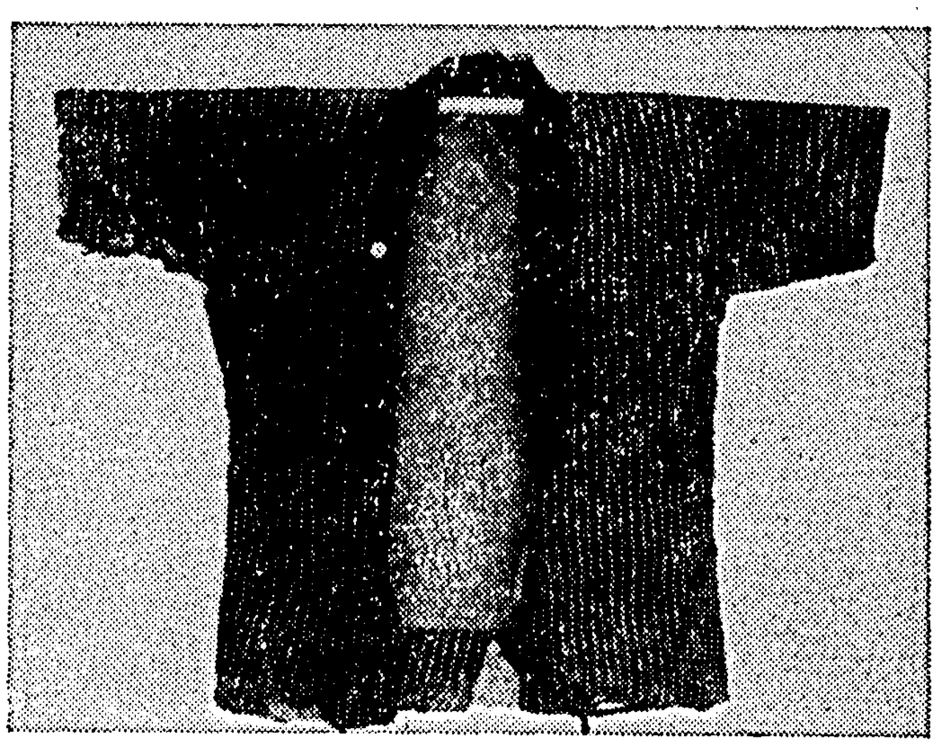
2—1　糸魚川（$E_3$）



2—4　藤塚浜（$A_2$）



2—2　島見浜（$B_2$）

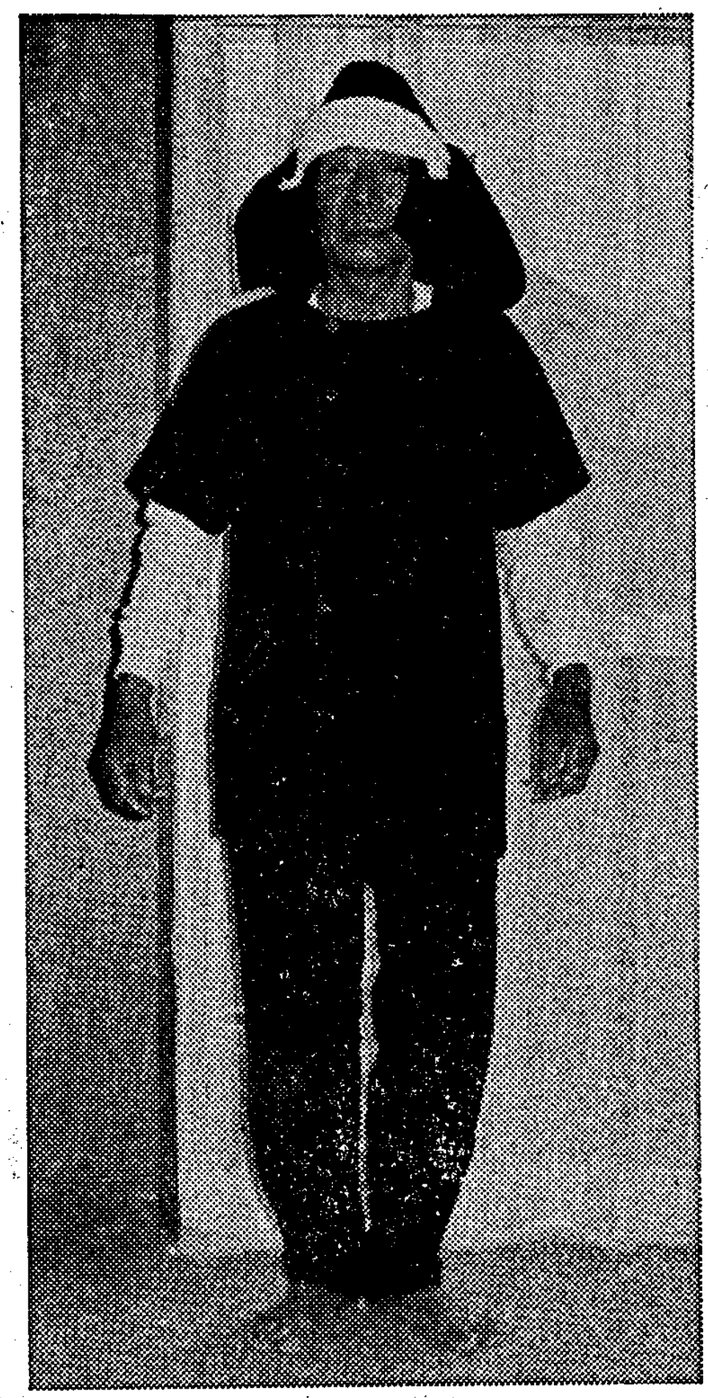


2—5　角海浜（$B_2$）

漁師の仕事着は、古くは丈長のドンザ形式のものだったと思われる。ドンザの袖型は基本的には巻袖、長着衿型である（2—1）が、別衿も多くカゲ衿もある（4—1）。仕立て方は、古布を何枚か重ね合わせてから単仕立てにしたサシコである。柏崎には、装飾性に富んだ（4—1）北海道での注文仕立てのサシコのドンザがみられる。これは衿型も袖型も多様である。

サキオリ仕立ての仕事着は、西蒲原郡では広袖（4—2）、県北では藤糸に裂き布や和紙を織りこんだもの（4—3、4）などがあり、いずれもカ

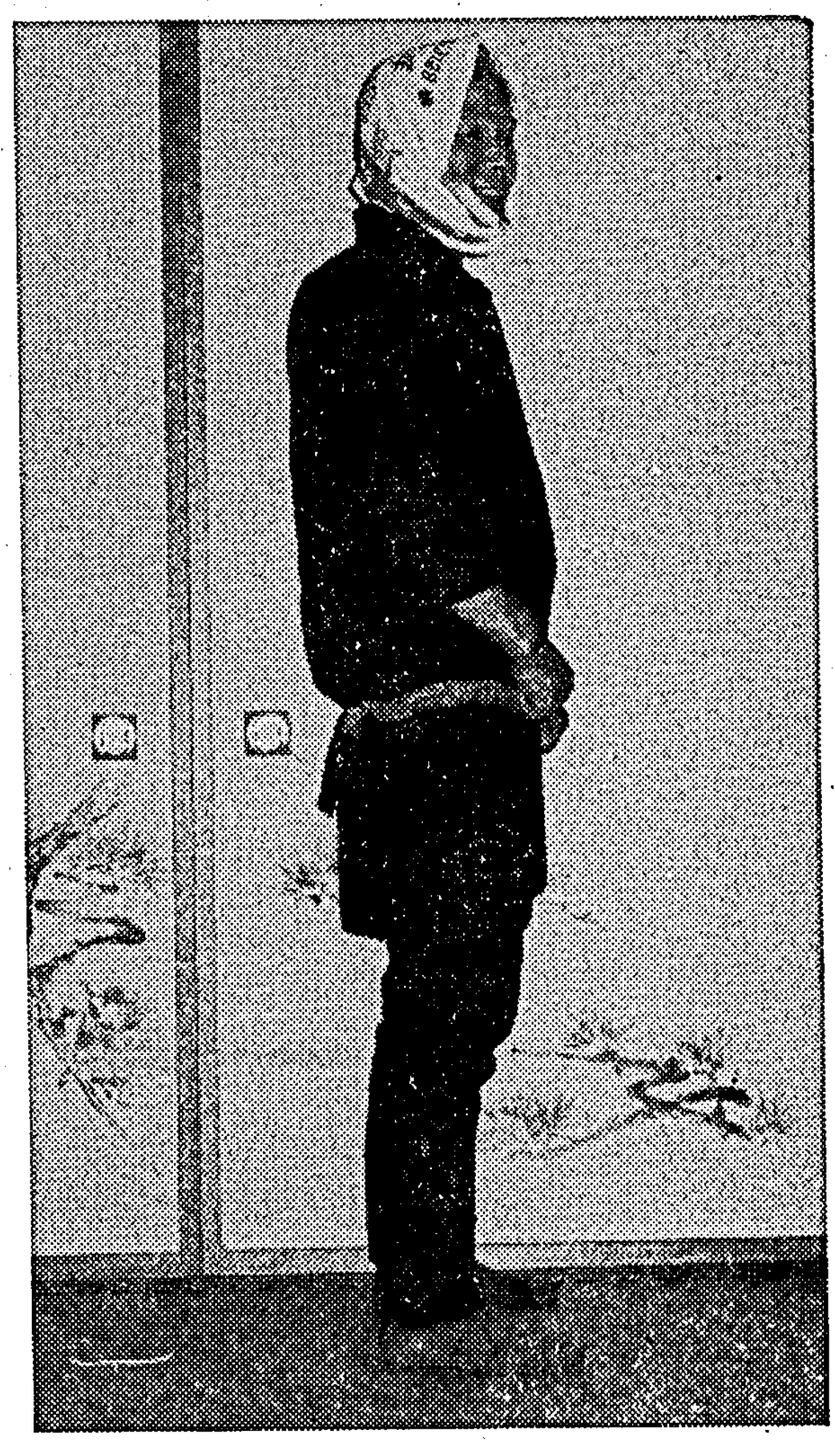
2—8 藤塚浜（$A_2$）

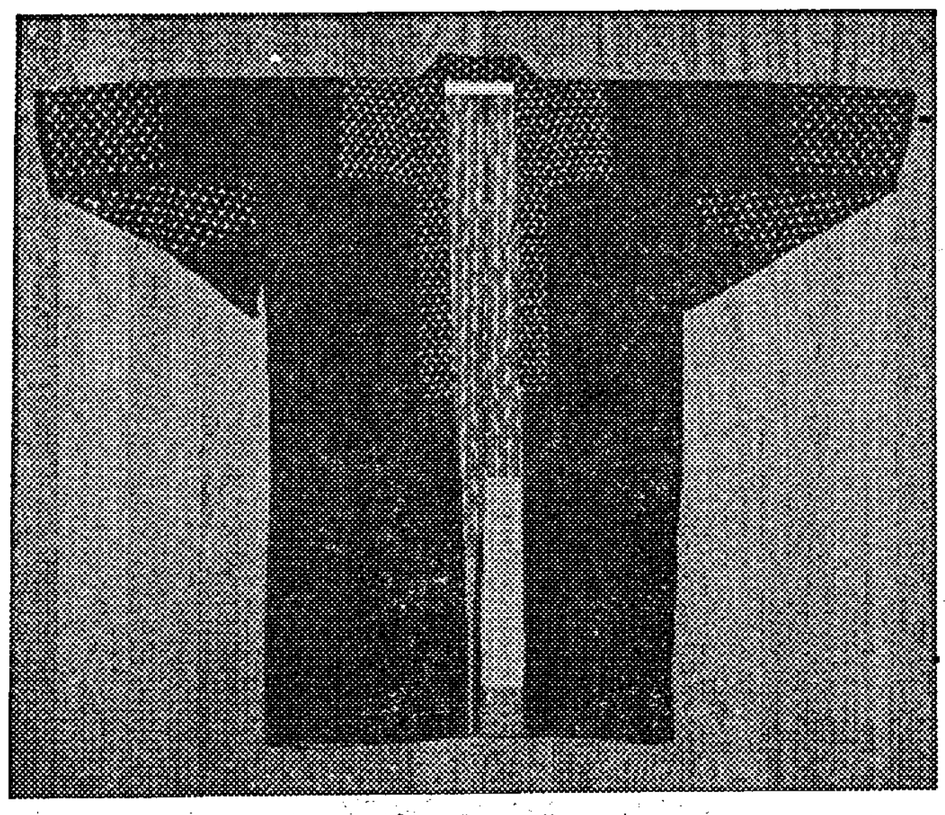


2—6 浦浜（$B_2$）

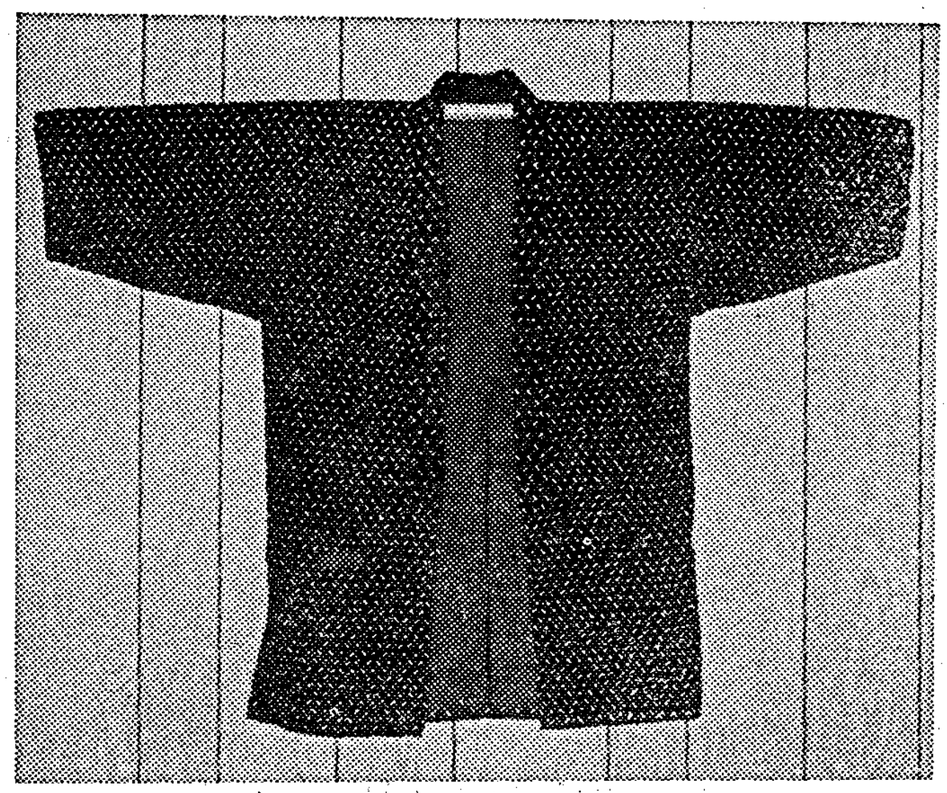
2—9 関屋浜（$B_2$）

2—7 島見浜（$B_2$）

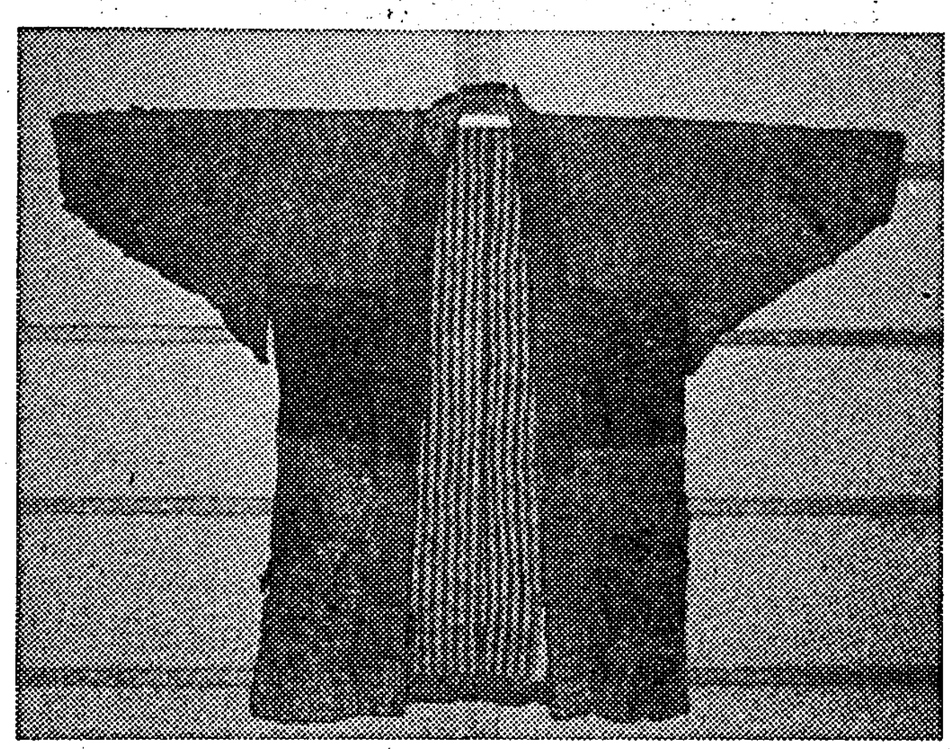




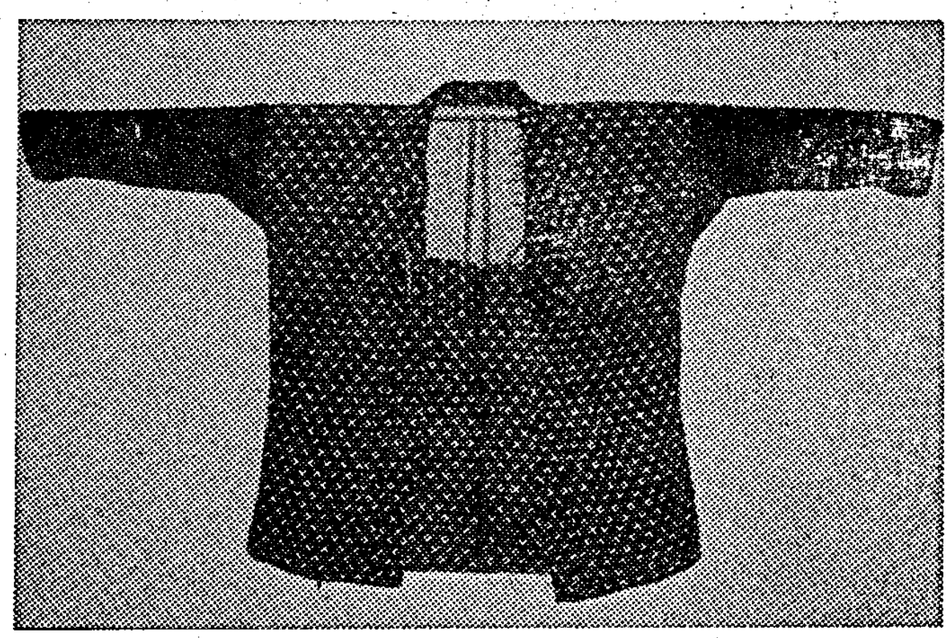
2—12　間瀬（$B_2$）



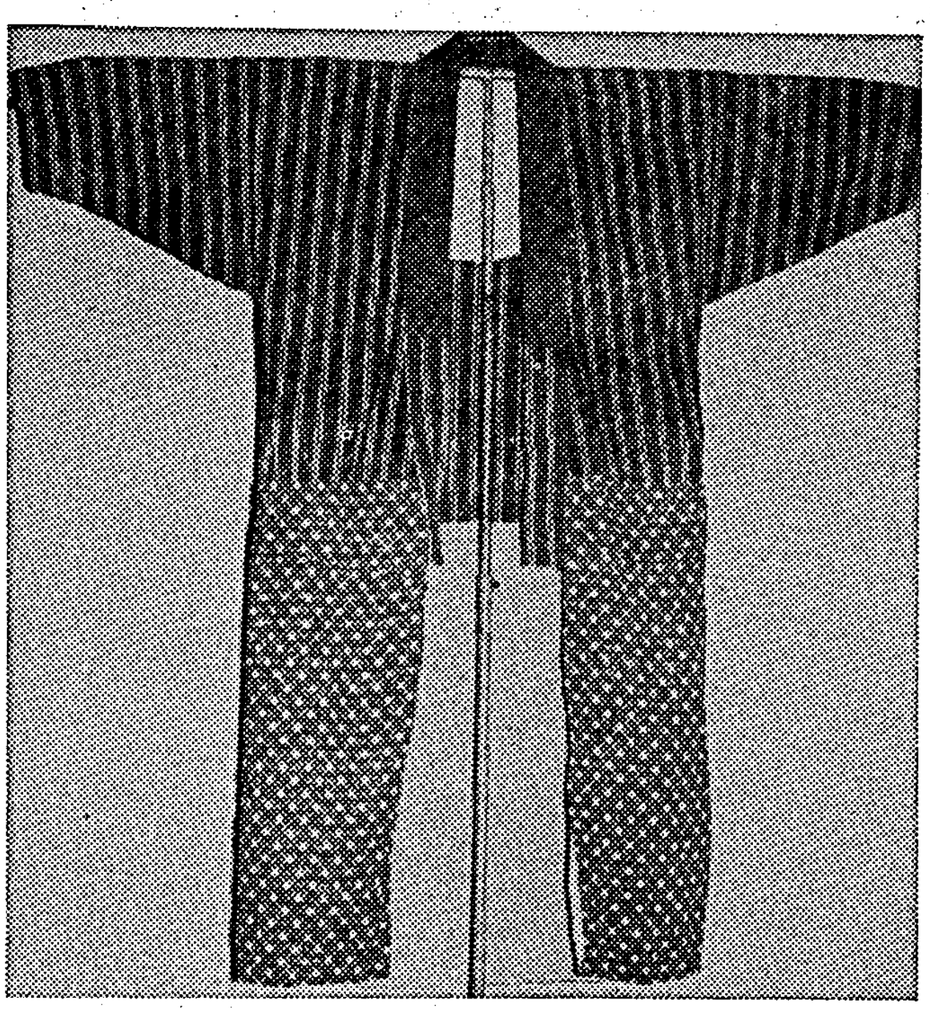
2—10　野積（$C_2$）



2—13　五ヶ浜（$B_2$）



2—11　角海浜（$B_2$）



2—14　藤塚浜（$A_2$）

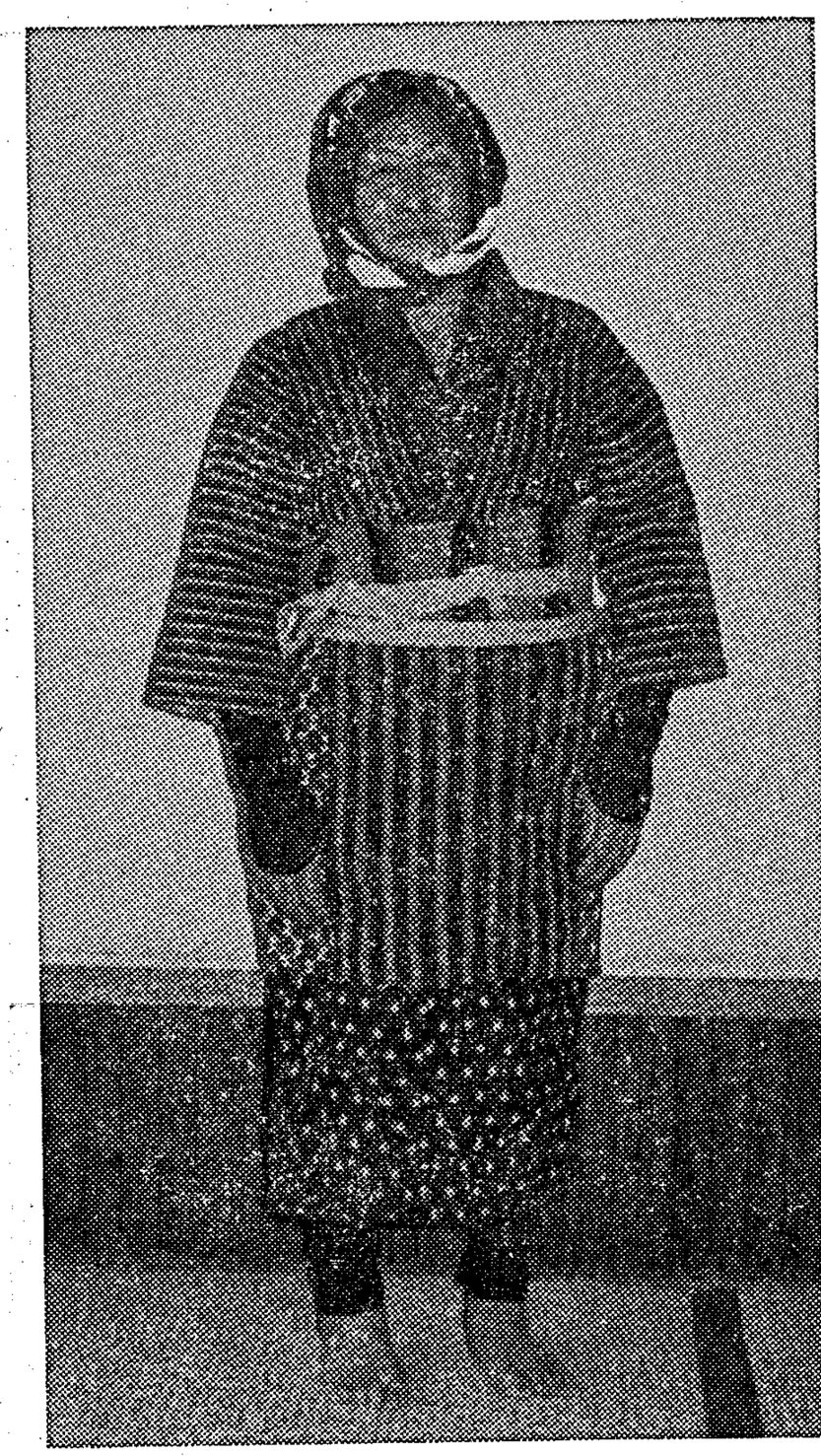
ゲ衿である。

ドンザの着装の仕方は、もちろん長着のため上に着るが、下衣はモモヒキをはく地域とはかないカラッスネのところがある。いずれも常時はドンザの後裾を帯にからげて尻ッパショリしている（2—6）。

漁村の山仕事には、西蒲原郡のようにサキオリの袖なし（4—7、8）を男女とも着る（4—7、8）ところもあるが、一般的にはサシコである。西蒲原郡や西頸城郡には、ドンザ丈を短くした巻袖でボロを厚めに刺したサシコ衣が男女ともある（2

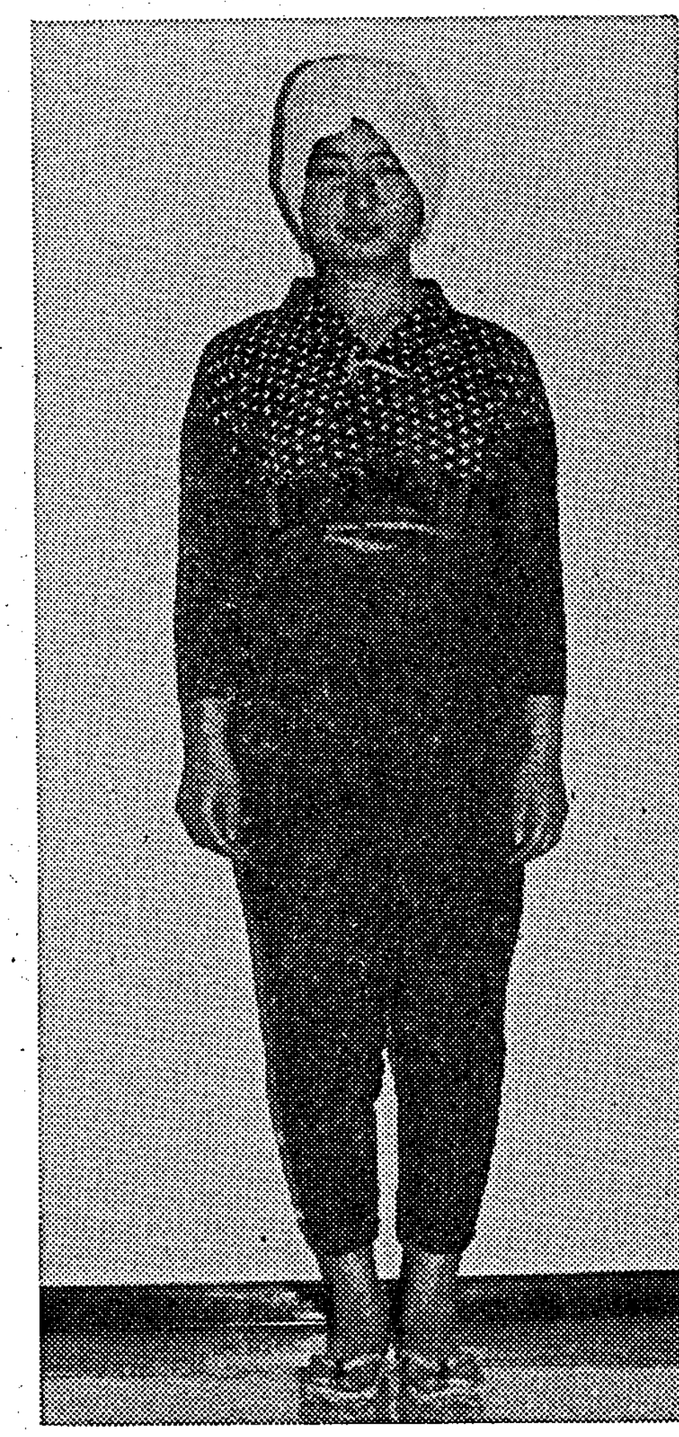
2—17 藤塚浜 (A2)

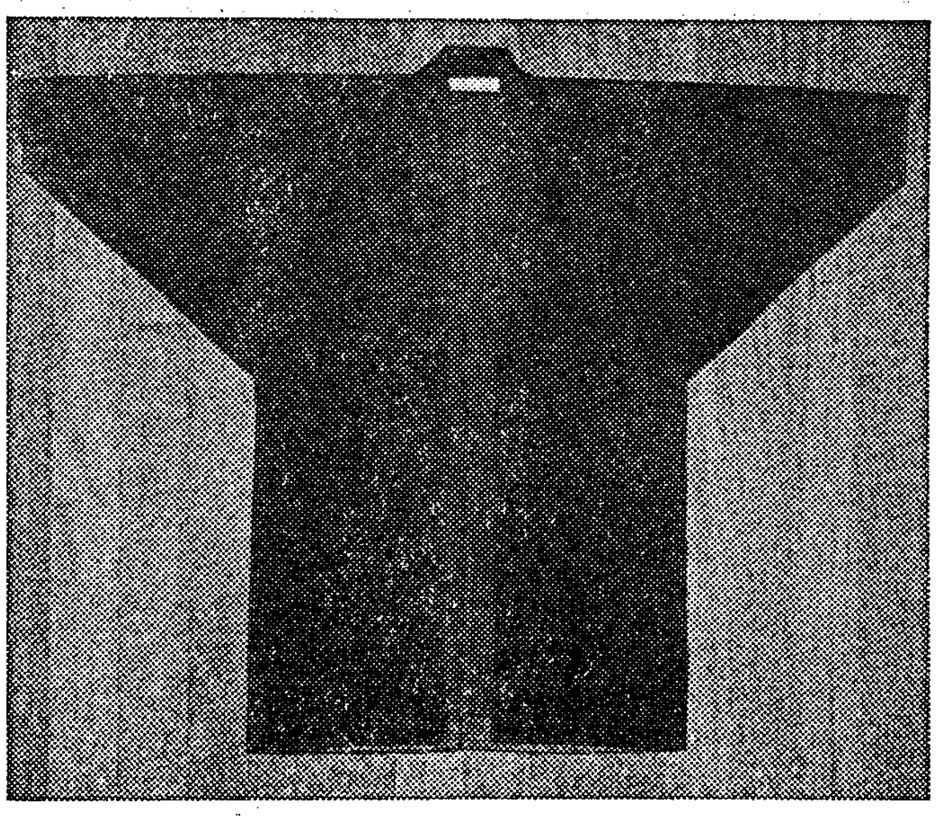
2—15 網代浜 (A2)



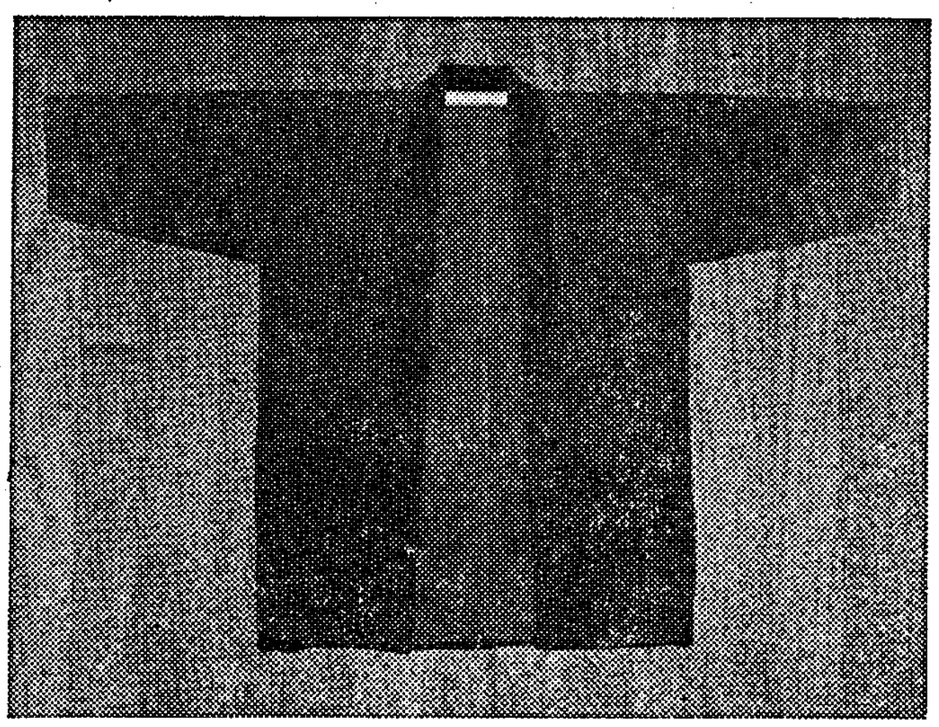
2—18 浦浜 (B2)

2—16 浦浜 (B2)



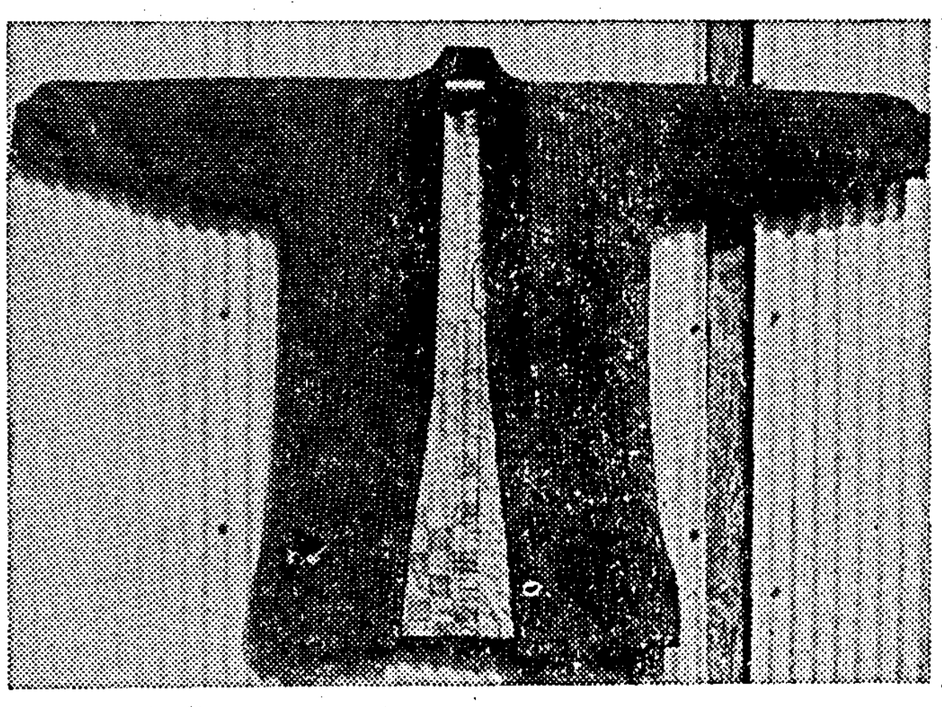


3—3　朝日（$A_1$）



3—1　関川（$A_1$）

3—4　三面（$A_1$）



3—2　三面（$A_1$）

—13）。男性はジュバン衿が多い。

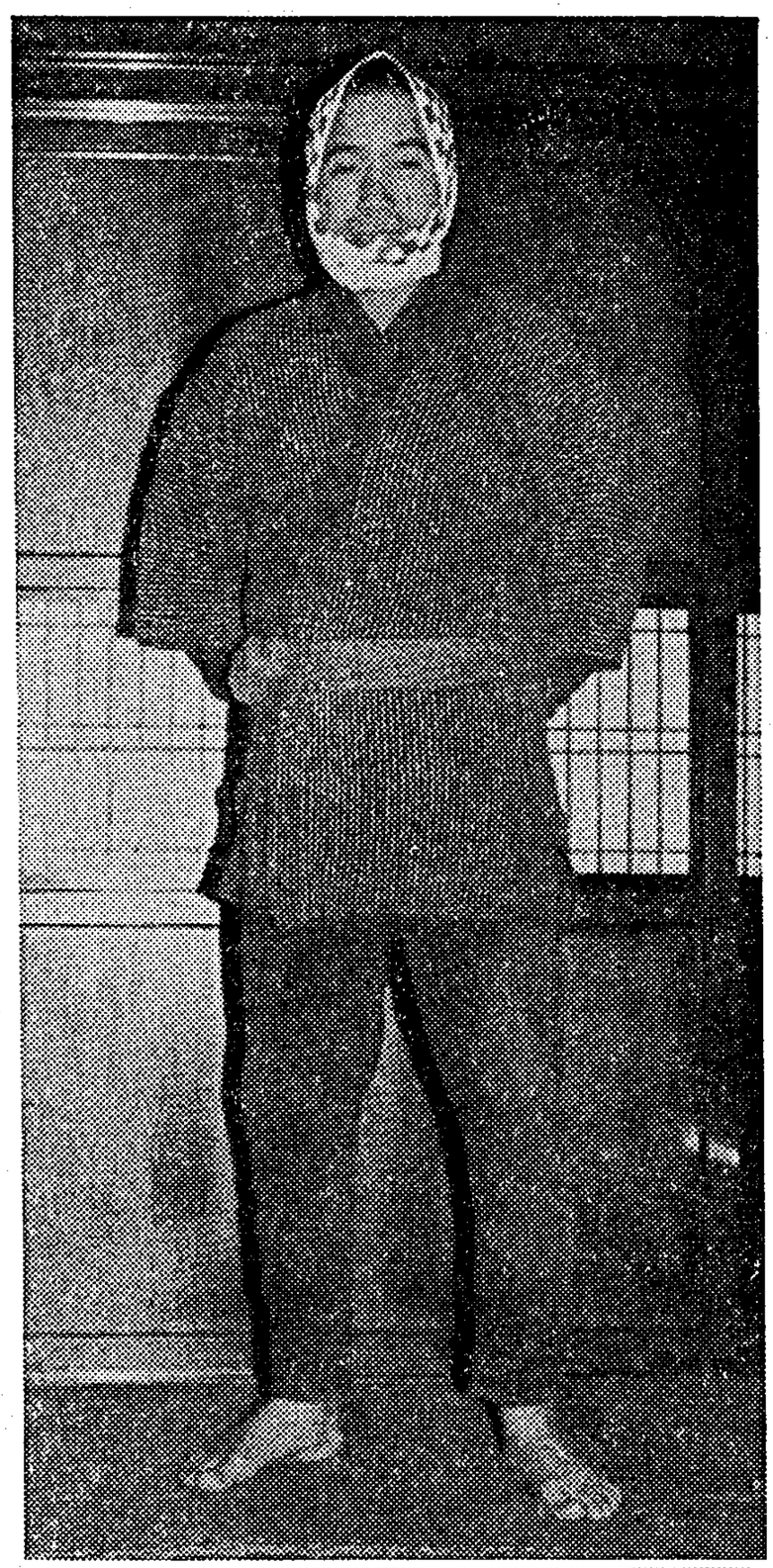
ドンザは早い時期にすたれ、洋服化した地域が多いが、その仕立て屋への注文服や既製品への推移の過程を、北蒲原郡やそれに近い新潟地域の仕事着にみることができる。すなわち、カゲ衿のテッポ袖（2—2）にジュバン衿の半袖（2—3）を重ね着して下に紺木綿のモモヒキをつける（2—7）。さらに、過渡期的なものとして、シャツ衿、曲線裁ちの半袖（2—4）とモモヒキが、いずれもコールテン地で、裏に縞木綿をつけた袷仕立てでつくられている。モモヒキはやはり上衣の内側につける（2—8）。このシャツの前身頃は右左の身幅が異なる（2—4）。これは村上の海女の格子木綿でつくるシャツ（4—10）にもよくみられるが、並幅布の布幅を有効にそのまま利用して洋風の仕事着をつくった時代の名残であろう。

新潟や西蒲原郡ではジュバン衿の短袖のワタイレがある（2—5）。丈は腰丈までで、最近でも洋服の上に着られていた（2—9）。

### (2)　女の仕事着

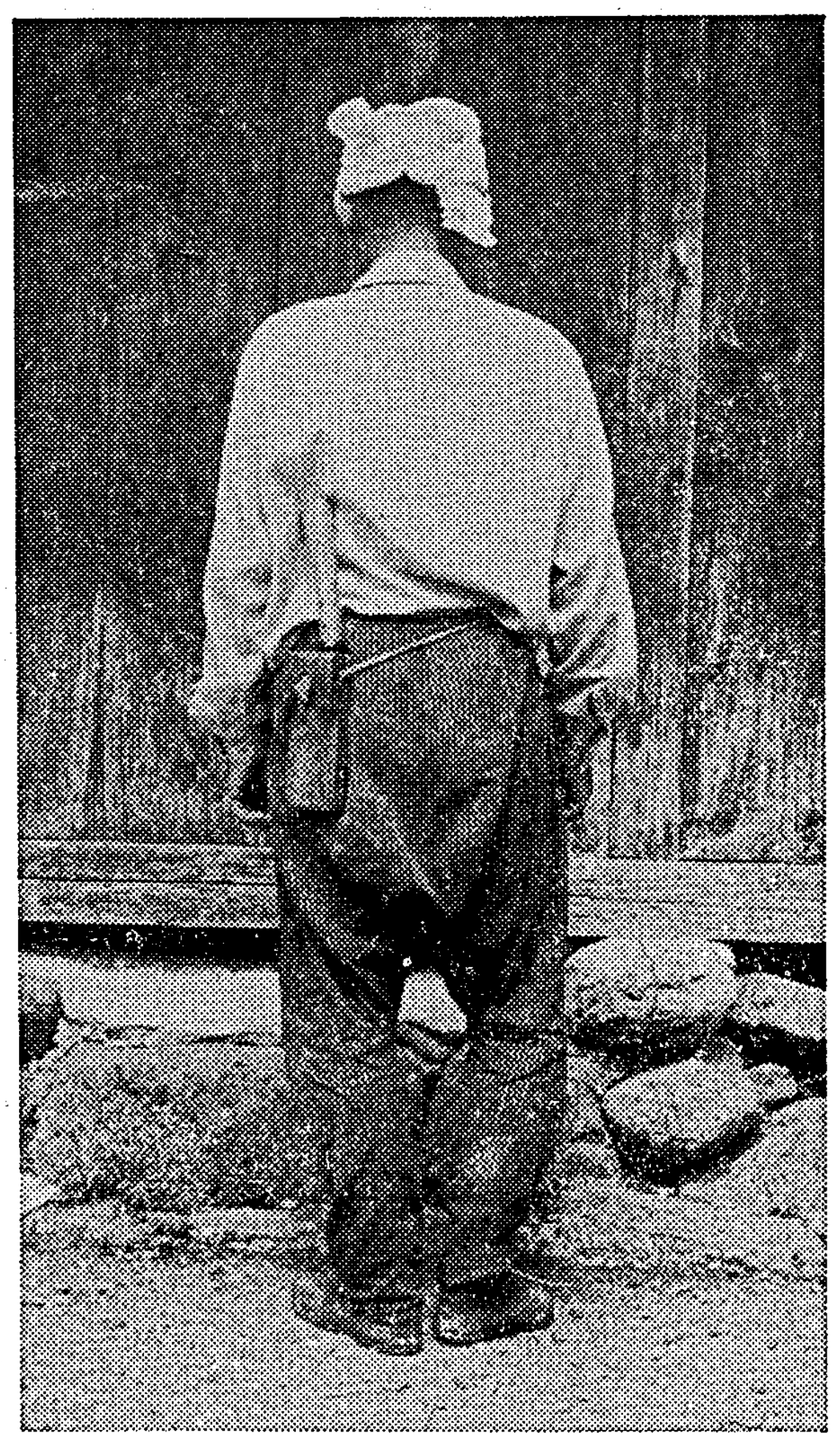
漁村の女性は浜仕事（魚を揚げる）や魚を売りあるく仕事のほか、わずかな畑の仕事や山の仕事

3—7 関川 (A1)

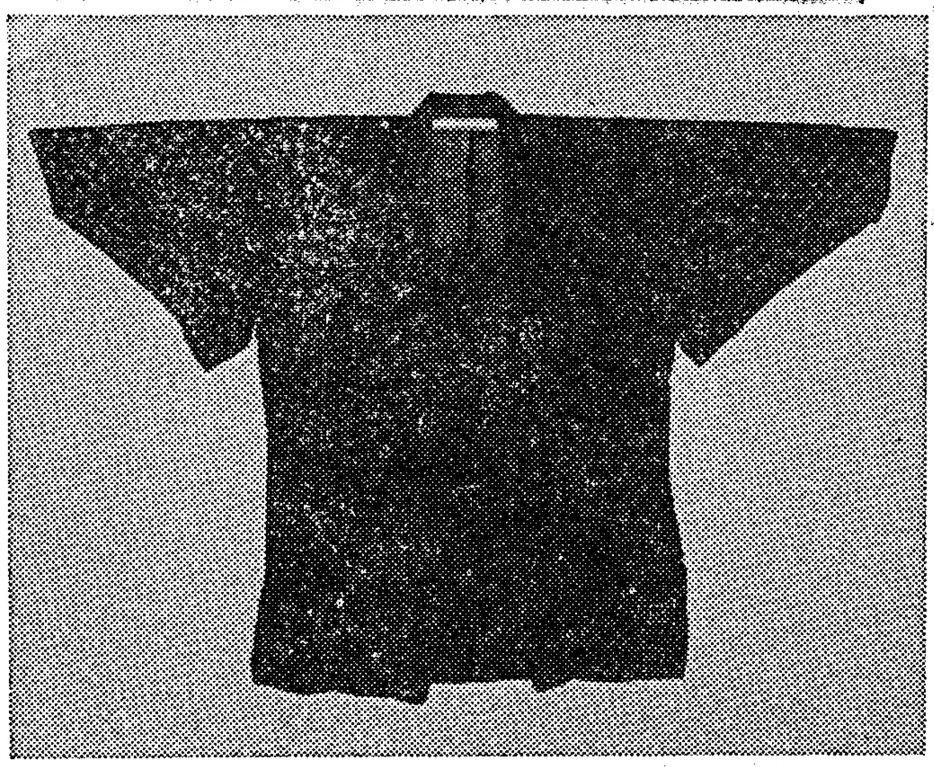


3—8 大和 (D2)

3—5 大和 (D2)

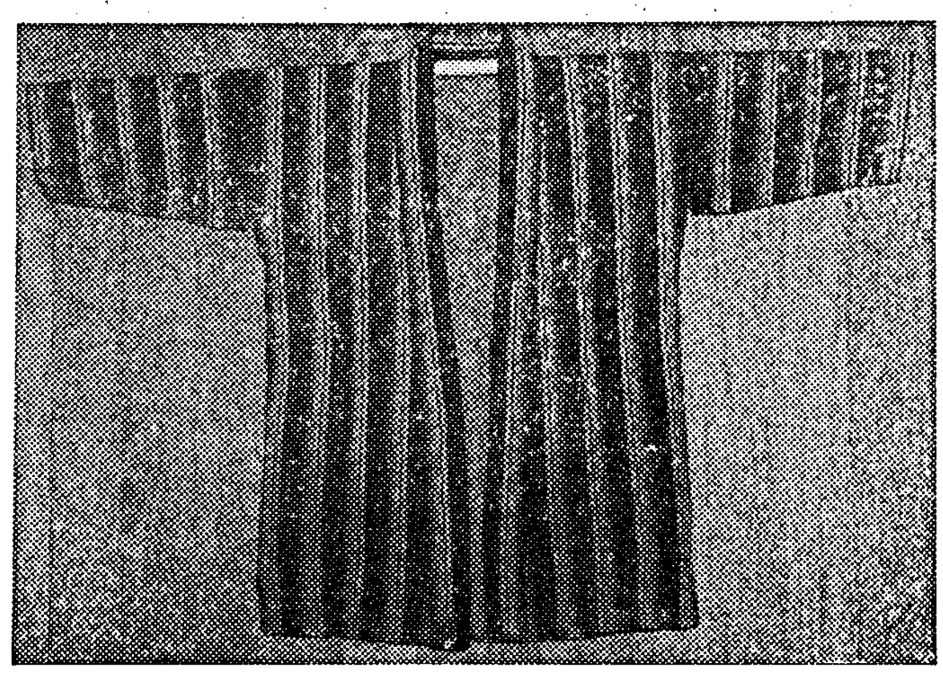


3—6 関川 (A1)

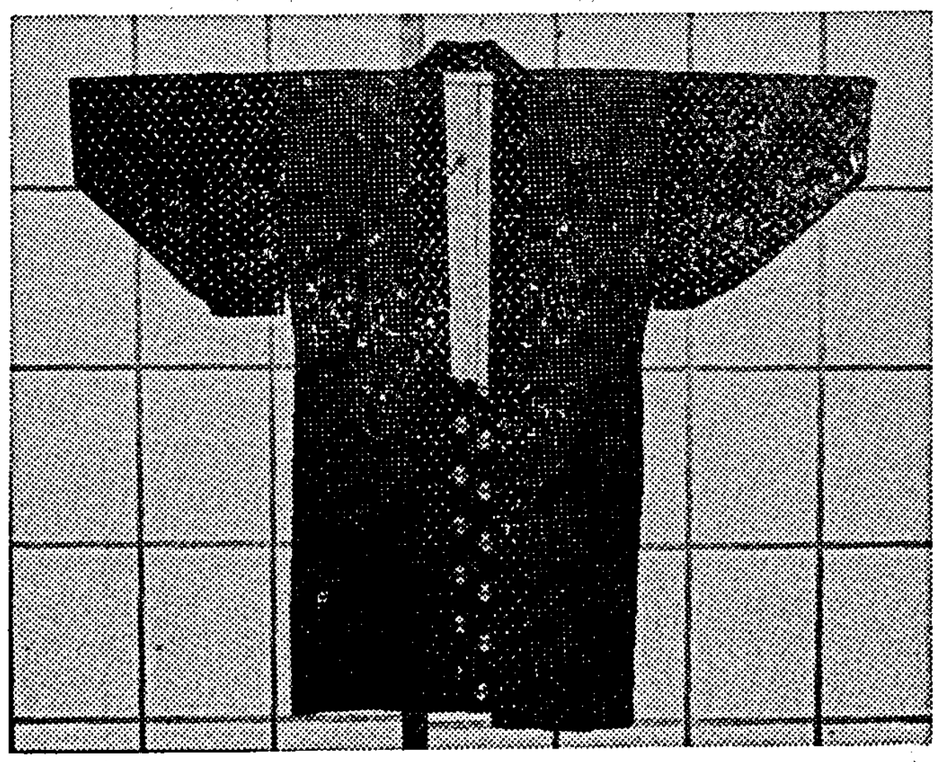


3—9　三面（$A_1$）

3—11　十日町（$D_3$）



3—10　松之山（$E_1$）



3—12　鹿瀬（$B_1$）

があり、地域によっては海女や出稼ぎ（毒消し売りなど）が加わる。

女性は漁村においても沖に出ることはないため、基本的には農村の女性と同様の筒袖が多いが、サシコが多いためか衿型はカゲ衿をよくみかける（2—10）。

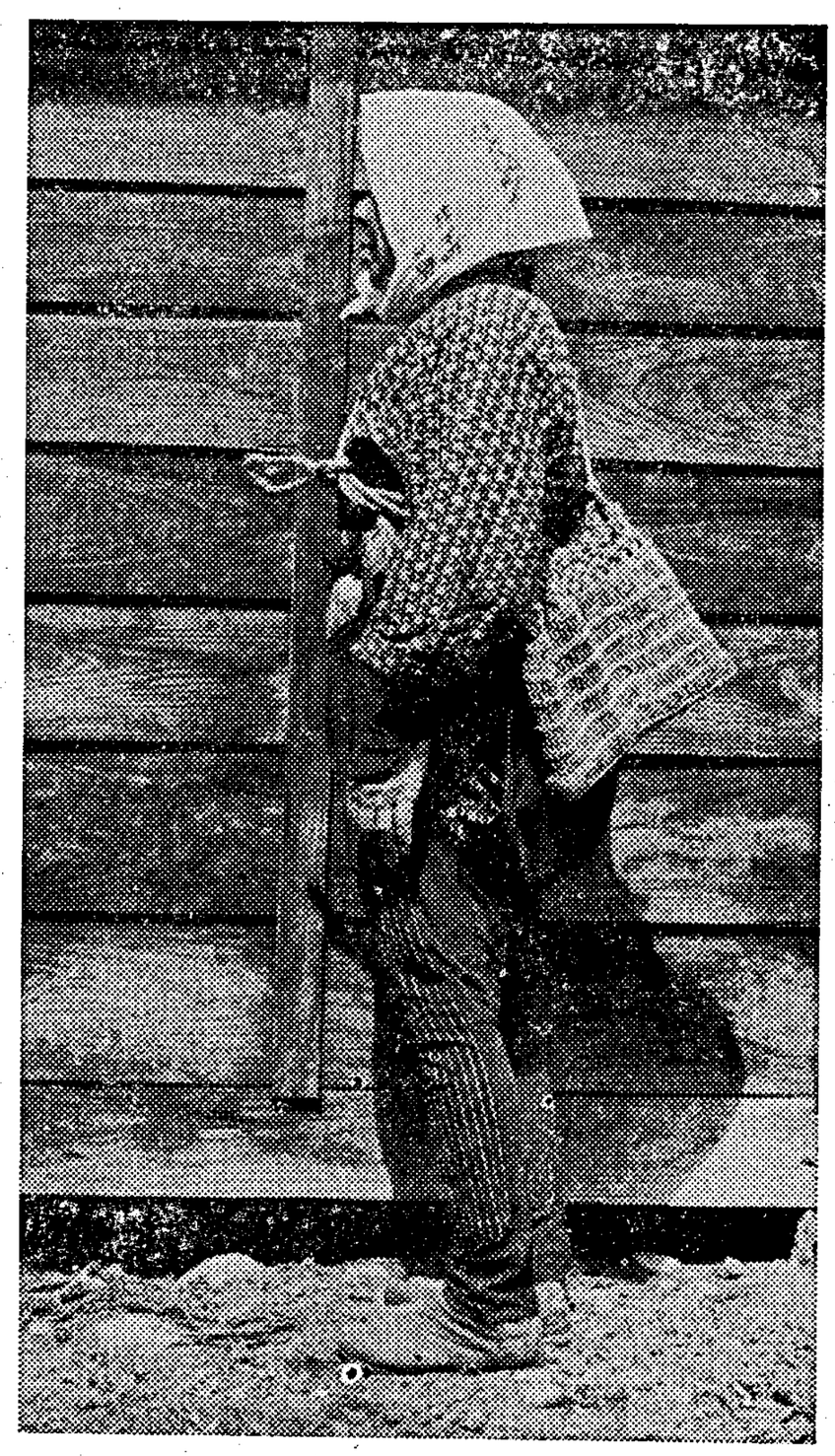
下衣はコシマキを上衣の内側につけ、畑仕事や魚売りのときはハバキをつける（2—15）。山仕事の時はモモヒキの上にハバキをつけたりもする（4—8、9）。

西蒲原郡を中心にテッポ袖の上衣（2—11）が

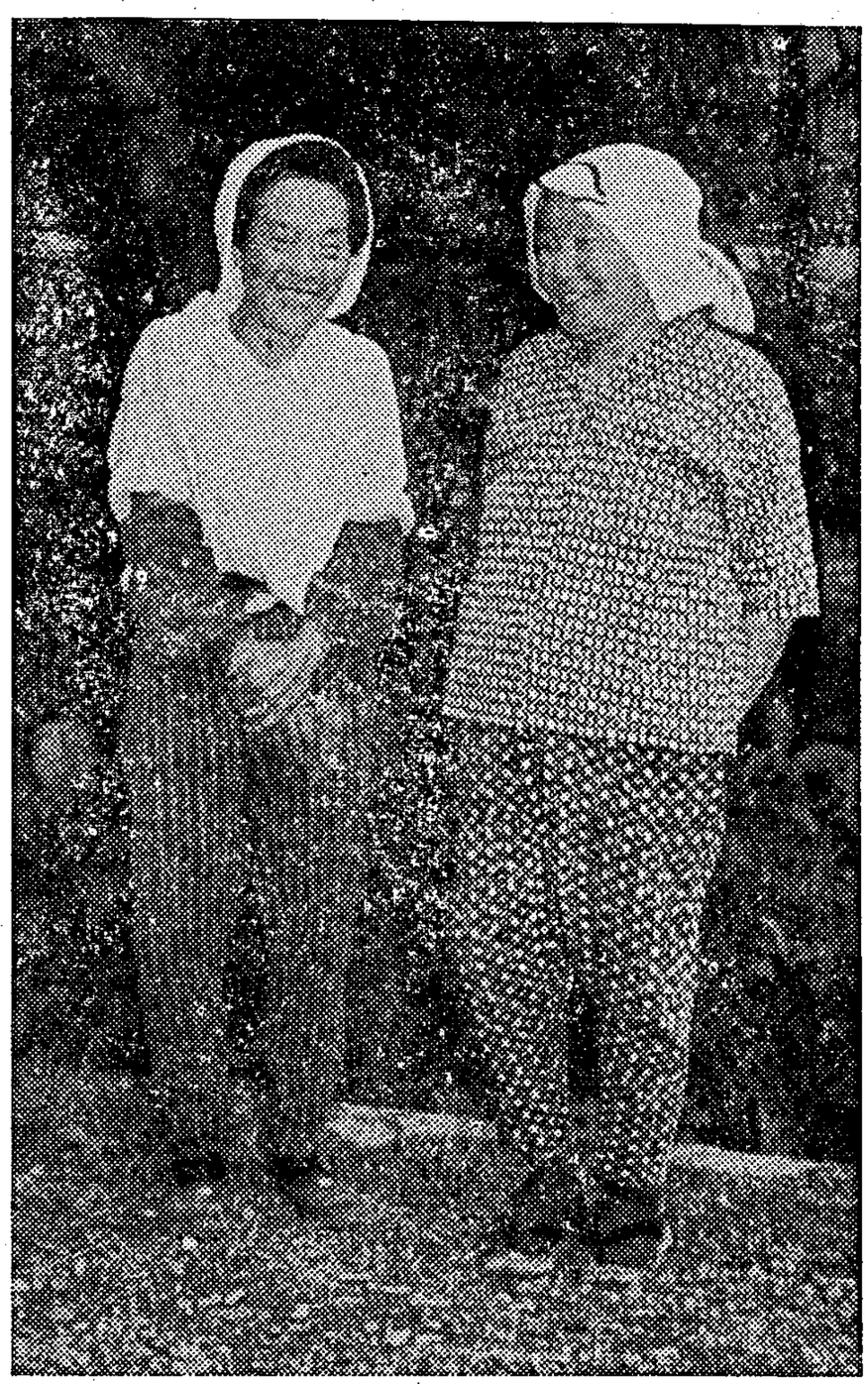
3—13　鹿瀬（$B_1$）

3—16 清里 (E2)

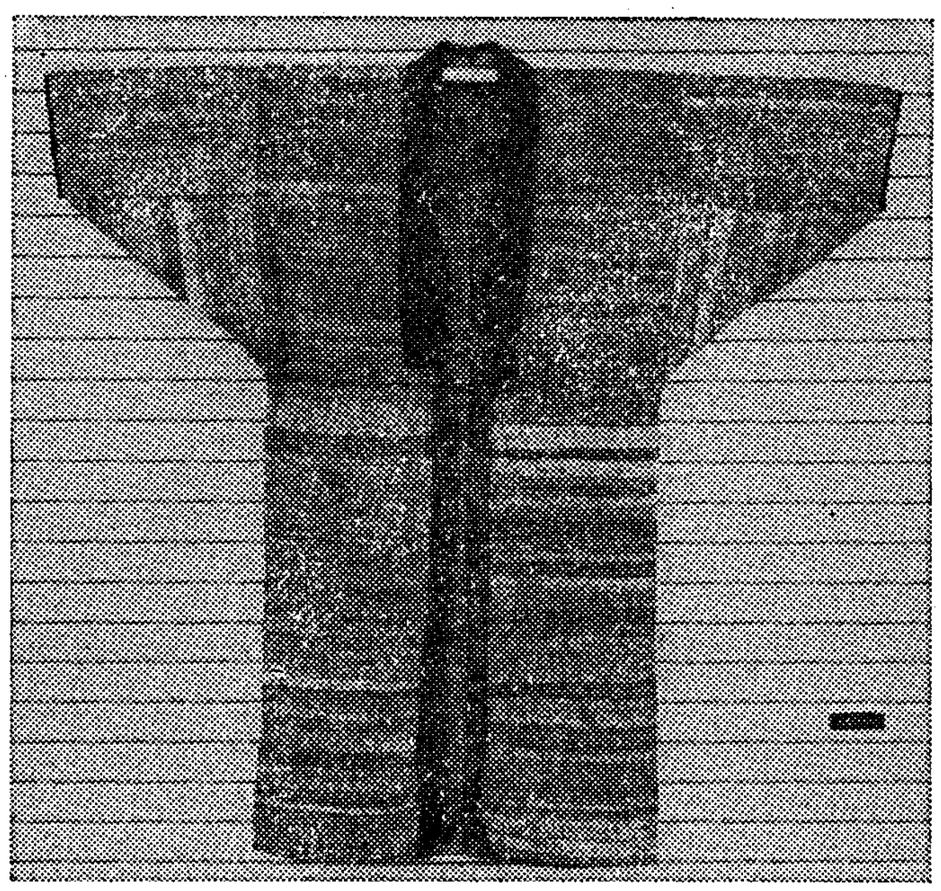
3—14 鹿瀬 (B1)



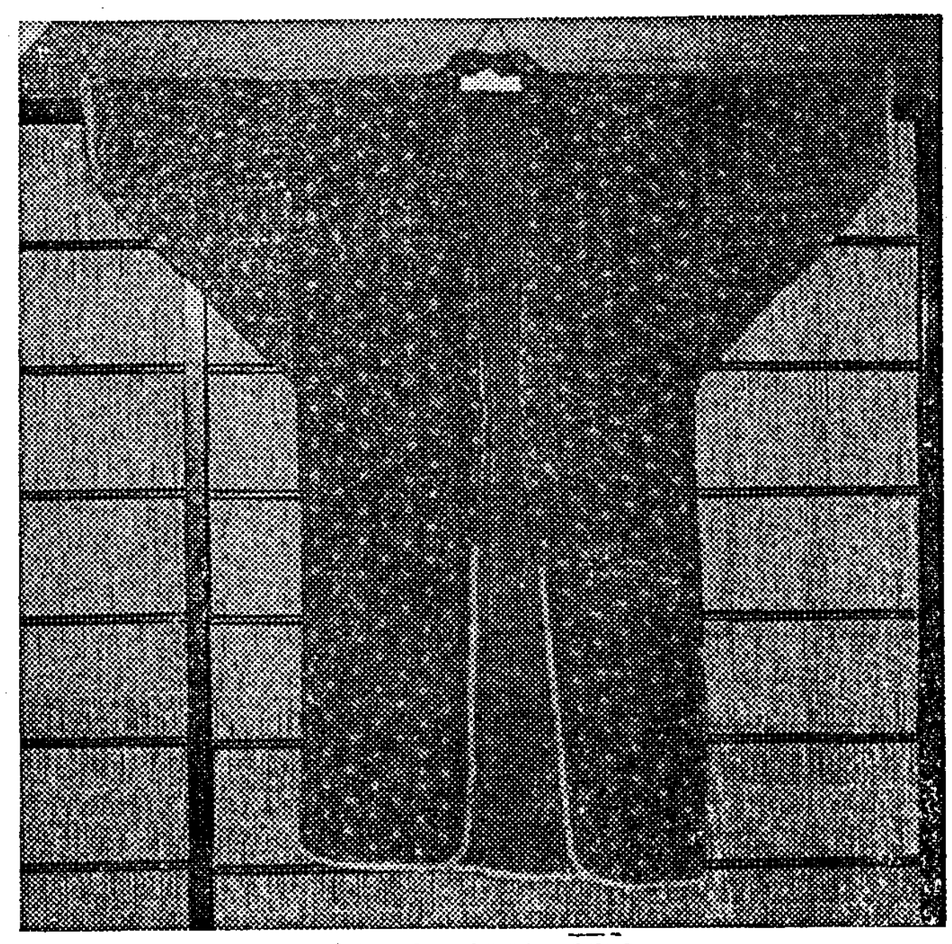
3—17 大和 (D2)



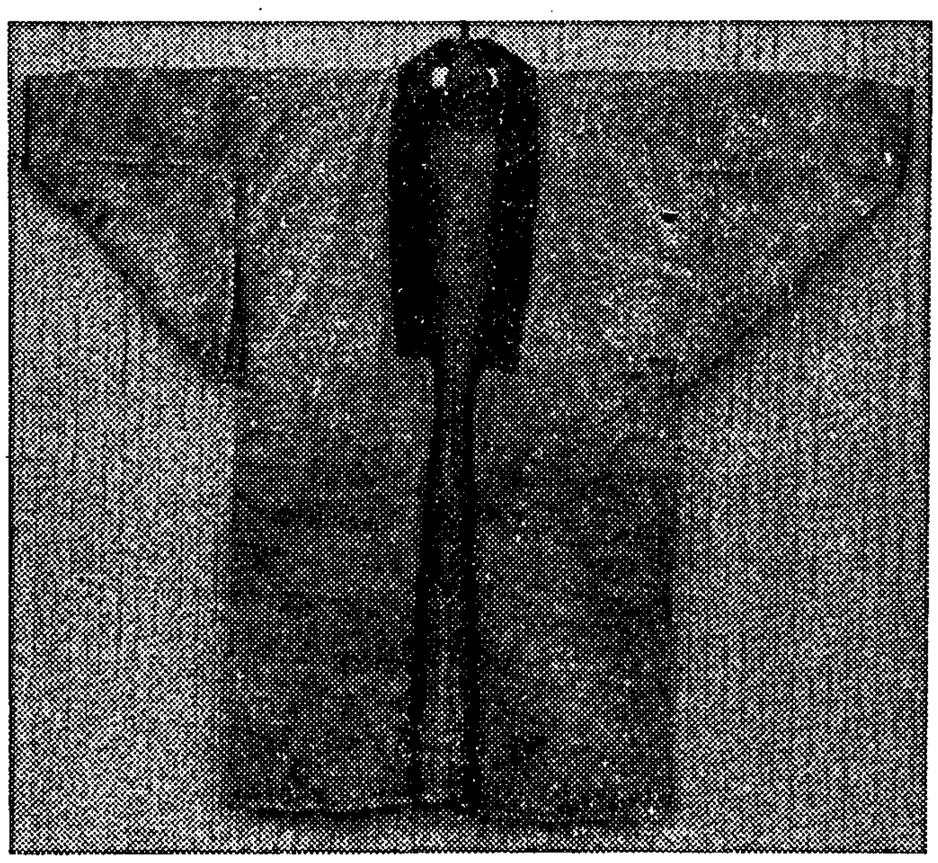
3—15 関川 (B1)



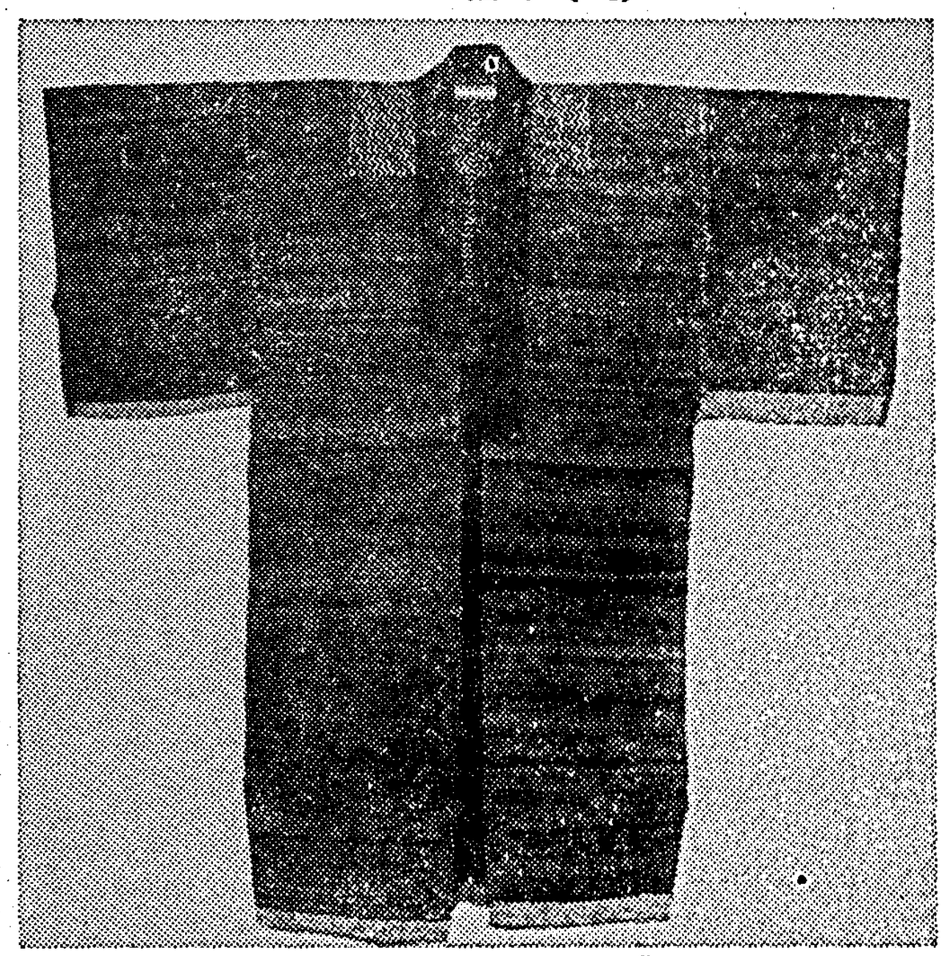
4—3　上海府（$A_1$）



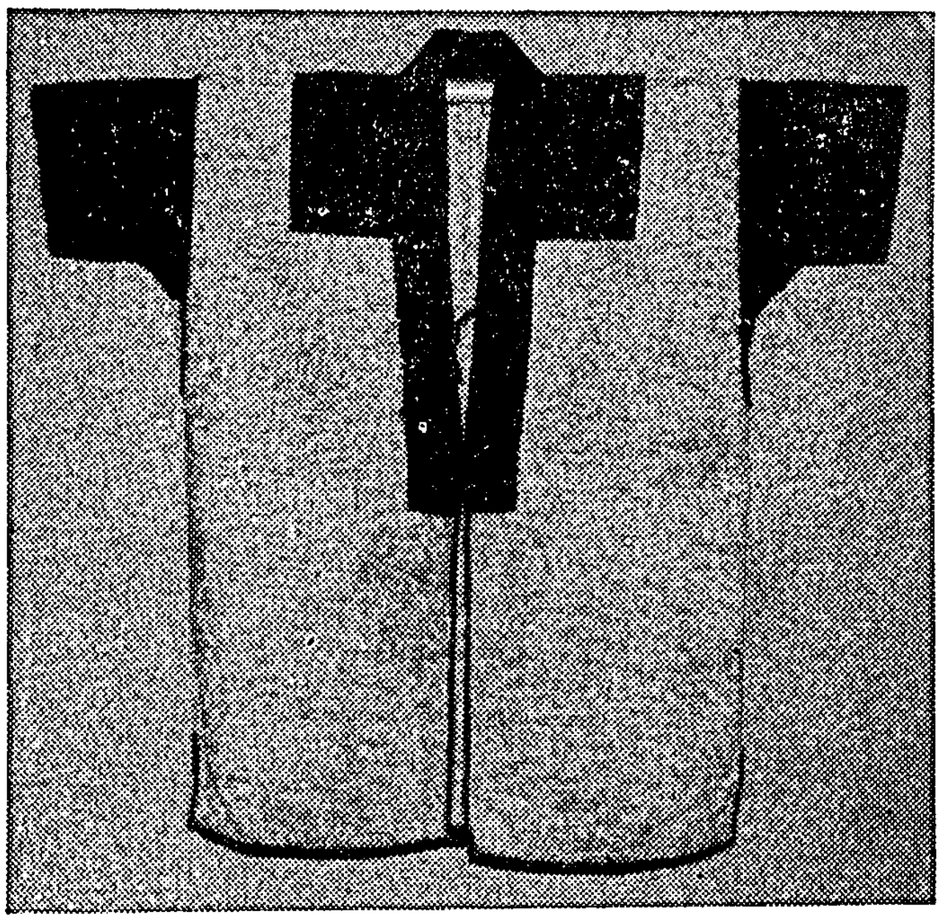
4—1　柏崎（$C_3$）



4—4　上海府（$A_1$）



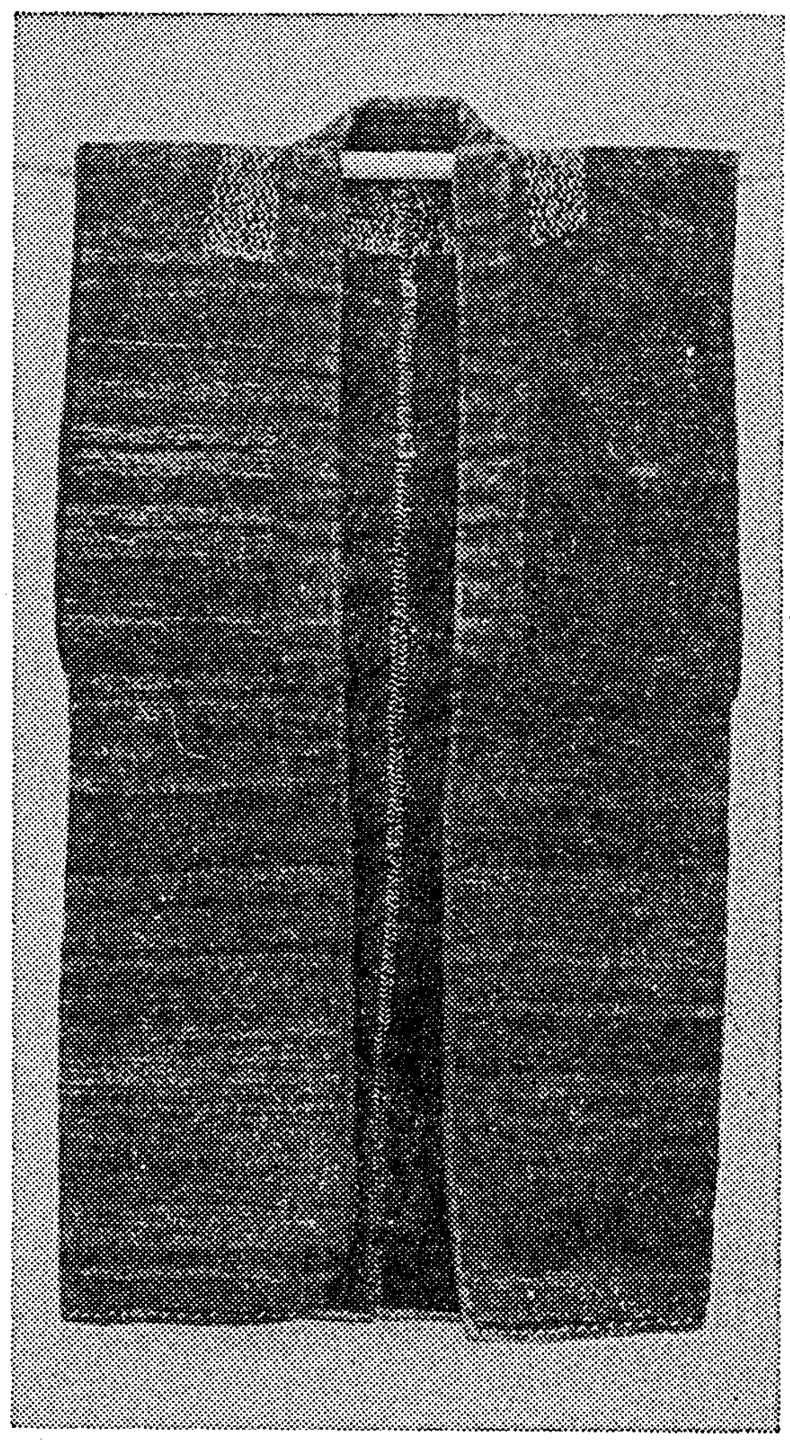
4—2　角海浜（$B_2$）



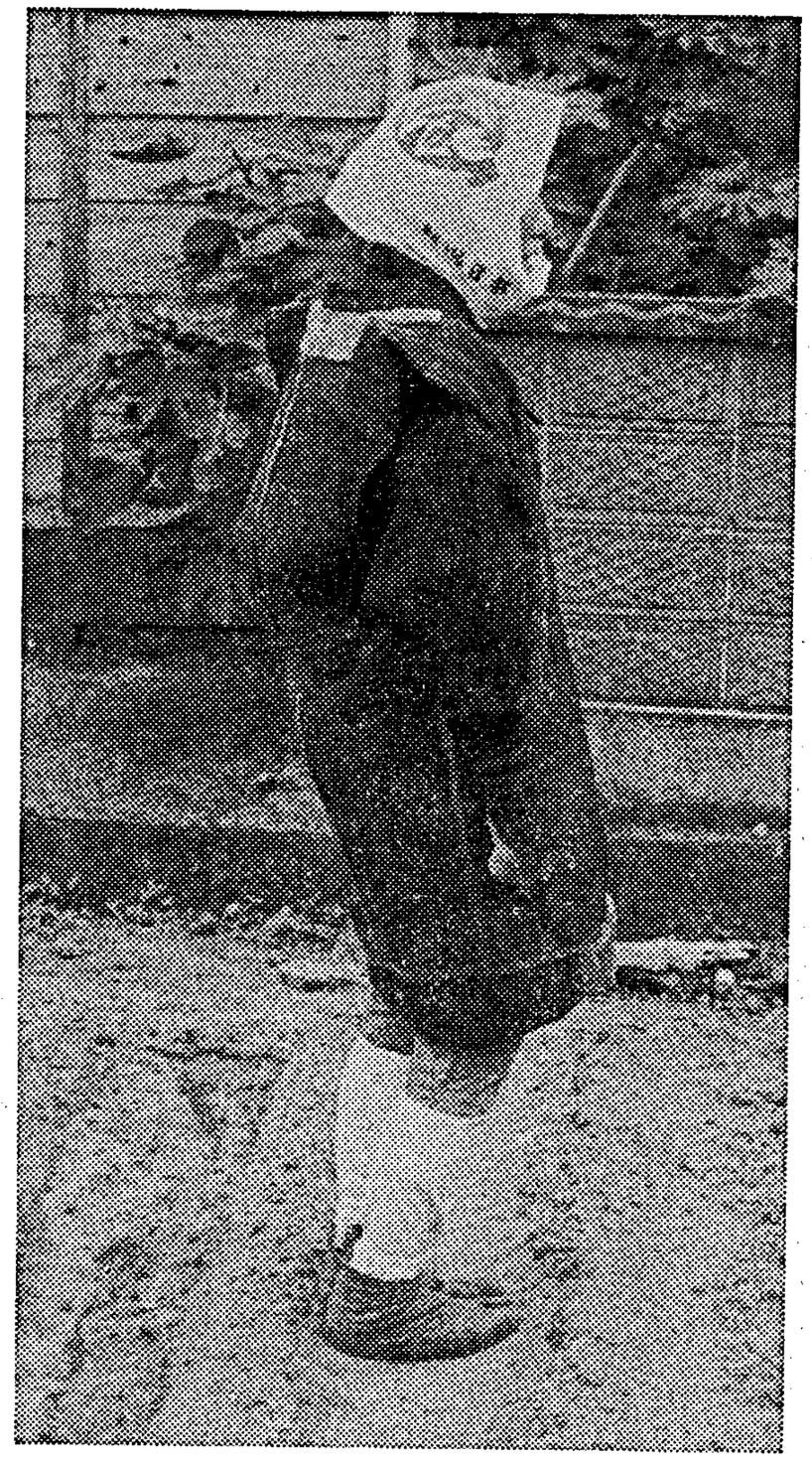
4—5　中浜（$A_1$）

用いられている。これは単やサシコ仕立てで、袖口は魚の網にひっかからないようにコハゼ止めにしたものもあり、袖（あるいは袖口）はすり切れた時に取り替えられるよう紺の別布のことが多い。寒くなると巻袖に振りをつけた女性用ドンザ（2—13）を重ね着する。装飾的に布をはぎ、サシコ模様を刺すところもある（2—12）。下衣は農村と同様、コシマキからモンペに代る（2—16）。衿型はテッポ袖の場合はカゲ衿が多いが、巻袖の時は別衿、ジュバン衿もある。

また、北蒲原郡、岩船郡、西蒲原郡では寒くな

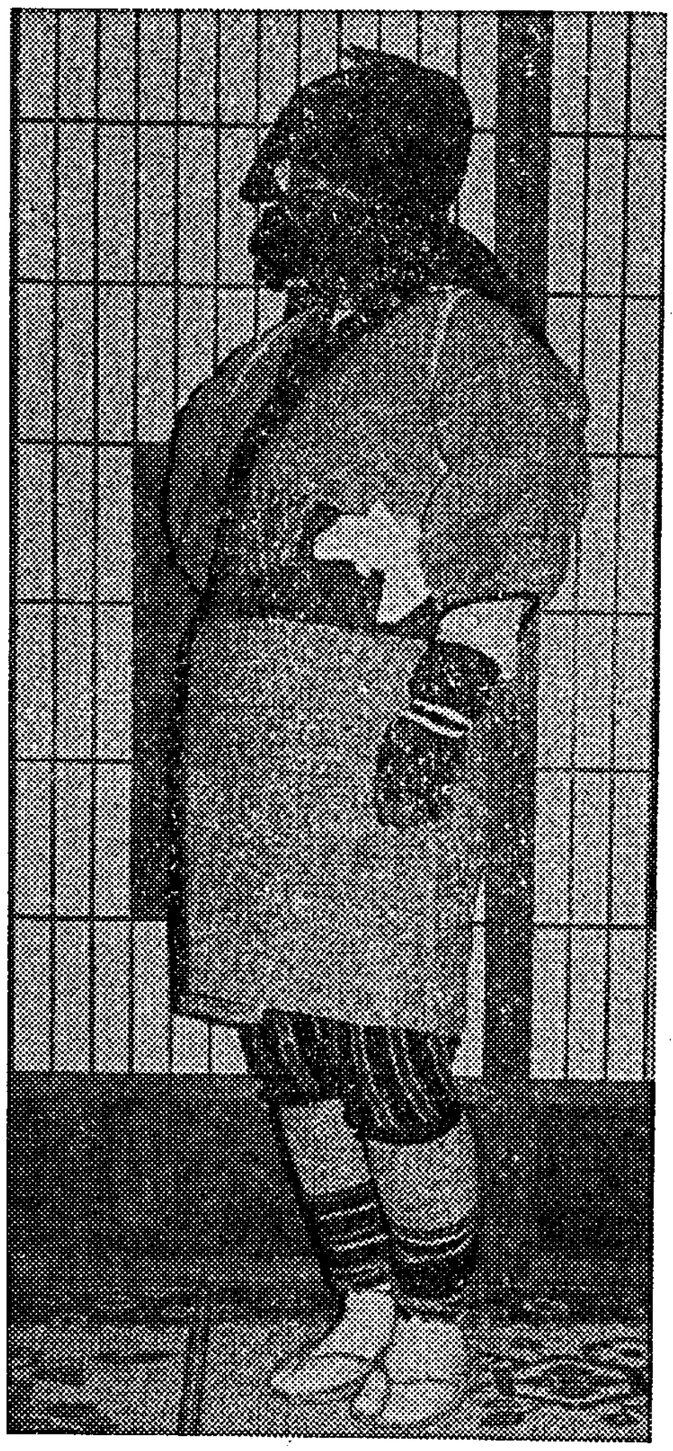


4—6 間瀬 (B2)



4—8 間瀬 (B2)

4—7 浦浜 (B2)



4—9 上海府 (A1)

ると上衣と腰巻を一枚に縫い合わせたような長着を着る。筒袖、別衿（県北はカゲ衿）で、下部はほとんど絣柄であり（2—14）、さらに上着を重ね着したとき、裾下に腰巻状の絣のみえることを配慮している（2—17）。

岩船では、さきの海女の特有な仕事着もみられる（4—10）。

浜仕事は、上衣とコシマキだけであるが、西蒲原郡では紺の麻の上衣を着る（2—18）ところもある。この紺地の麻衣は、地域を問わず男性の夏のくつろぎ着としても着られている（4—11）。木綿以前の織物として各地にあったものであろう。袖型は筒袖であるが、山間部の、福島県に隣接する東蒲原郡（4—13）と長野県に近い中魚沼郡（4—14）には佐渡のサキオリやサシコの袖に類似した、半幅で丈長な広袖があった

4—10　上海府（A1）

（ただし東蒲原郡のものは仕立ててから下部を折り上げて筒袖状にしてある）。これは室町・桃山期の初期の小袖をしのばせる狭い袖幅である。

女性の山仕事については前述したが、サキオリ地帯の岩船では、巻袖の藤布衣（4—9）や、半袖の糸織衣（4—5）など、山でいばらにささっても破れない強い衣類を上着の外衣として着ている。

### 3　山村の仕事着

漁村における山仕事の多様な衣服についてはすでにふれたが、ここでは内陸部の岩船、東蒲原、刈羽、魚沼、東頸城の山間部の田畑や山における仕事着をとりあげる。耕作地は少なく、冬期の出稼ぎの多い地帯でもある。

4—11　寺泊（C2）

(1) 男の仕事着

山村の男性の仕事着も基本型は農村と同類であり、筒袖、ジュバン衿（県北はカゲ衿）であるが、特に県北ではサシコ衣が多い（3—1）。洋服衿のテッポ袖もあるが、農漁村よりも和服形式のテッポ袖（3—2）が多く着られているようにみえる（3—6）。寒くなると上に筒袖を重ね着する（3—7）。紺無地の巻袖の細かい縫い目のサシコ衣（3—3）も男女とも所蔵されているが、すでに久しく着用したことのない古い衣類となっている。

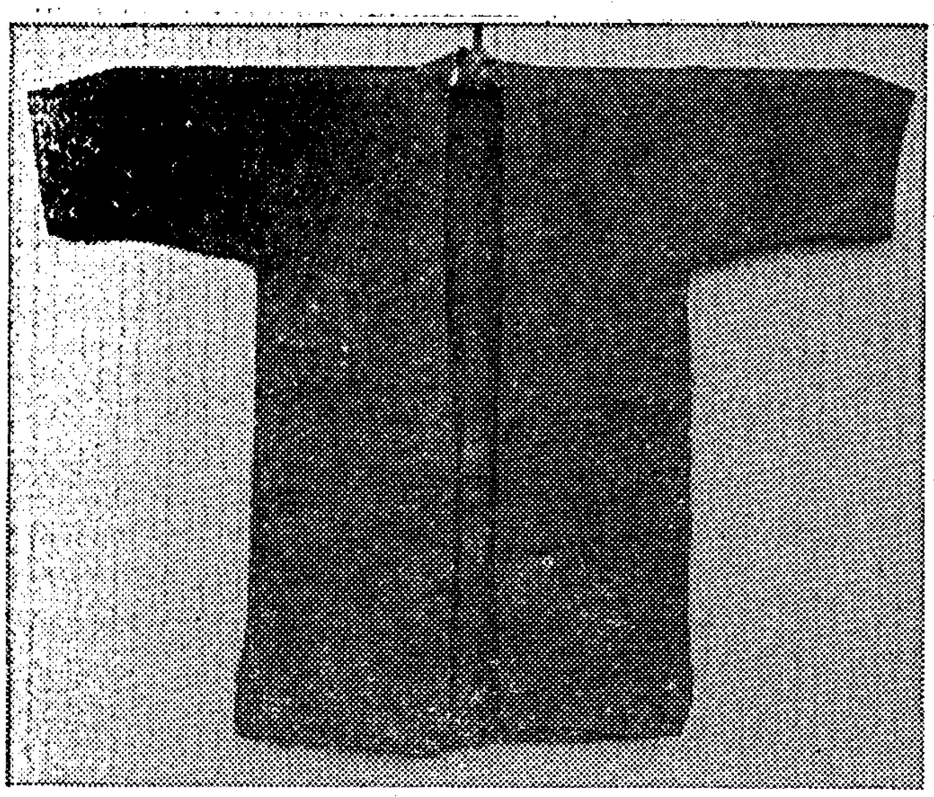
また県北では、身頃からつまみ縫いしてジュバン衿風にみせたカゲ衿に時折り出合う（3—3）。

下衣には山袴が男女とも各地で着用されており（3—5、14）、最近でもシャツと組み合わせてはいていたところもあった（3—8）。これは上衣を着込めて外側にはく。ここでの山袴とは股下に方形のマチをもち、後布や別マチが細長く裾部に至る脚部の細く尻部のだぶついた下衣である（3—13）。

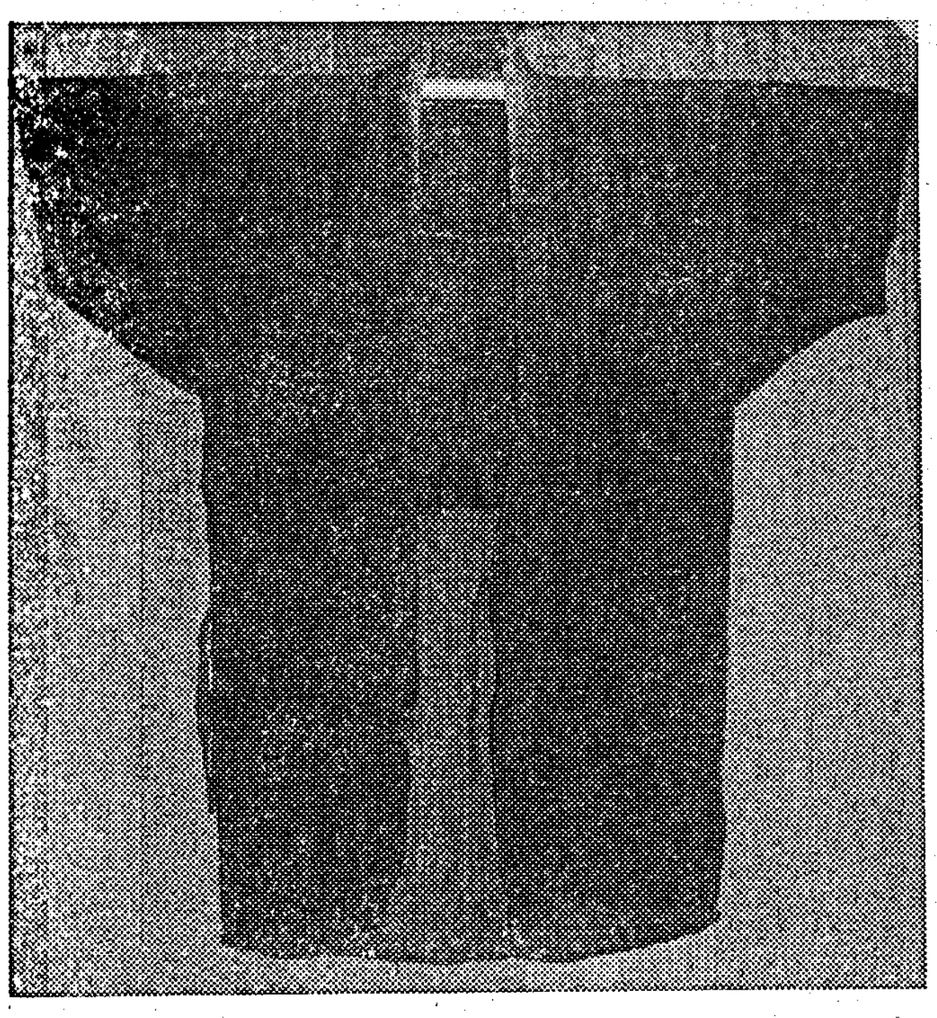
また、方形などのマチをもち、裾部まで前布と後布からなる丈の短いだぶだぶのユキバカマも岩船や魚沼にみられた（3—4）。

(2) 女の仕事着

女性の仕事も田畑と山仕事であるが、一般的には農漁村とあまり変らず、筒袖、ジュバン衿（県北はカゲ衿）の上衣であり、県北部は男性と同じようなサシコが多いが（3—9）、特に魚沼、東頸城では農村部と



4—12 上海府（$A_1$）

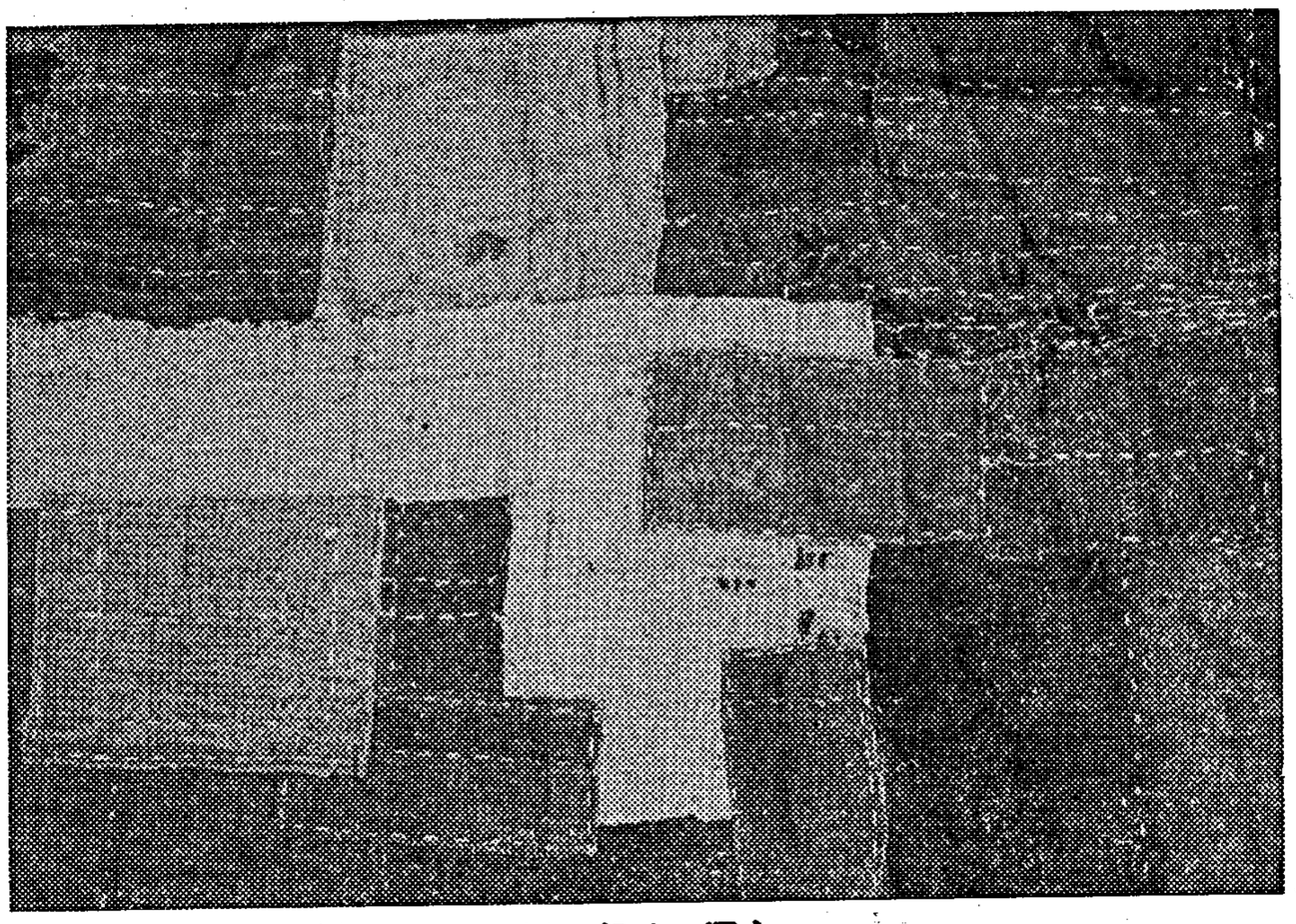


4—13 鹿瀬（$B_1$）

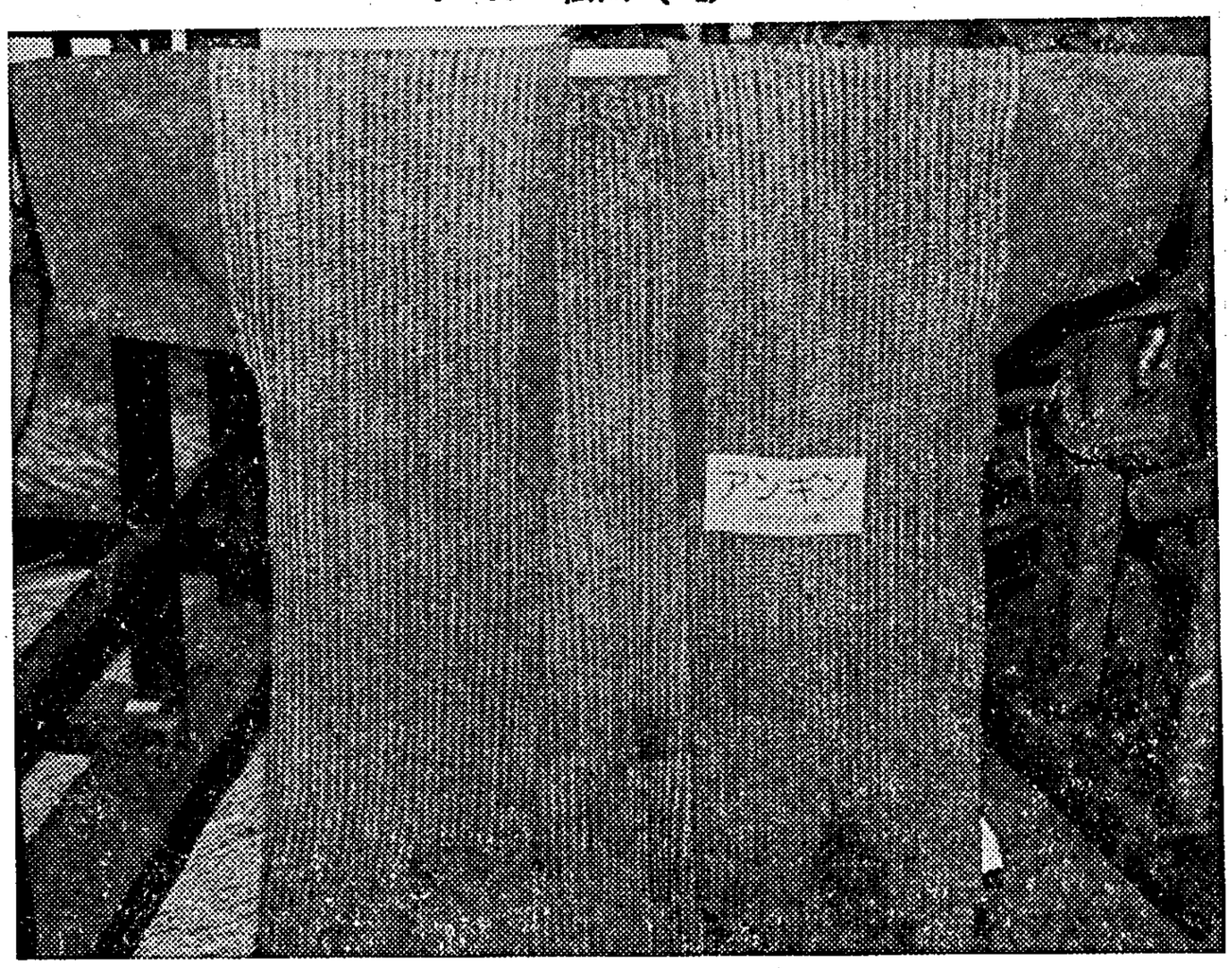
4—14 十日町（$D_3$）

同様、仕立てのたしかな単や袷（3—10）も着られており、寒くなると重ね着する（3—15）。

魚沼・東頸城には男女とも、小さいボロ切れを綴ってつくったブイトウ（4—15）の時代が、今日みられる仕事着以前に長くつづいていたはずである。織物以前の衣料として脚光をあびたアンギン（編衣）もあり（4—16）、他地域とは異なる特有な衣文化が奥深い山村に残存していた。



4—15　松山（$E_1$）



4—16　津南（$D_2$）

下衣は縞の山袴がほとんどの山村の地域に広く着用されていた（3—13）。モンペも次第にはかれるようになったが（3—16）、モンペと並んで最近まで山袴を着用していたところもある（3—17）。いずれも上衣を着こめて外側にはく。

かつては行政的にも会津藩に属していた東蒲原では、新潟県にはあまりみられない見事な山仕事用のサシコ（3—12）がある。男女とも着用していたが、刺し模様が若干異なる。袖や衿にはサシコはなく、ジュバ

4—17　大和（$D_2$）

ソ衿と別衿があり、また、袖には巻袖や筒袖があり、女性用は巻袖でも身八つ口と振りがある。山仕事に用い、山袴の上に着る。

このほか特殊な衣類としてゼンマイ採り用の仕事着がある。地域によって異なるが、採ったぜんまいをテゴなどに入れず片袖だけ大きくつくった巻袖（4—17）に入れた。懐をゆったりととるように着て、胴囲りに袋をつくって入れたりするところもある。

## まとめ

新潟県の農山漁村の男女の仕事着の上・下衣について通観したが、仕事着の基本型の県内での地域分布を知るために、衿型、袖型、下衣の各各について種類別に分布図を作成した。図1、2、3の通りである。

袖型については、筒袖が農山漁村を問わず県下全域に分布しているが、その衿型はジュバン衿が多く、両者の分布はかなり重なる。しかし、県北の漁山村の岩船郡にはカゲ衿が圧倒的に多く、その他の地域には別衿も併存している。

テッポ袖や半袖は、県北から各蒲原郡を経て中越地方にまで及ぶが、これはカゲ衿の浸透している地帯と重なる。下越地方以北はサシコ仕立てのものが多い。

巻袖は沿岸部の漁村のドンザの袖として圧倒的に多いが、山間部の女性の山仕事にも、振りをつけ、タスキをかけて用いられている。丈長のドンザの衿は長着衿のほか別衿も多いが、丈の短いものはジュバン衿やカゲ衿である。いずれも大半がサシコ仕立てである。

長着衿は、ここでは冬期や屋内の仕事着をはぶいたため農村部にはみられなかった。

袖型は比較的、仕事着の種類によって選択され着用されていることが多い。

しかし、衿型は衣料の種類や衣料の潤沢さの有無が、仕立て方、さらには衿型に影響を及ぼしているのではないだろうか。藤布、サキオリ、サシコ地帯は、素材からみてカゲ衿仕立てが適しており、木綿の豊富にある農村地帯では、季節に合わせて単、袷、ワタイレ仕立てをつくることができ、衿型も、体型の大小や、手持ちの布の量や、他の付帯品（前掛など）との裁ち合わせの都合などで選択されることが多い。

下衣は男性はモモヒキ、女性はコシマキであったが、田仕事には水田向きの半モモヒキも県下全域ではかれており、女性もモモヒキをはいた。上衣との組み合わせは、上衣の内側にモモヒキをはく。もっとも明治後半期ころまではモモヒキはなく、男女とも裾をはしょって田仕事もしたとも言われている。

山袴は山間部を中心に分布している。上衣との組み合わせは、いずれも山袴を外側にはくのが一般的であるが、さらにその上に厚手のサキオリやサシコなどを着ることもある。

モンペは昭和十年ごろから一斉に普及しはじめ、戦時下の事情も加わり、女性にとってはコシマキに代わる下衣となった。モンペのひろまる数年前に山袴も農村部に流行しはじめたが、モンペの勢いに押され定着する余地をもたなかった。モンペも上衣の外側にはく。

新潟県上、中、下越の仕事着の型は、県の東西に、海岸部の漁村、平

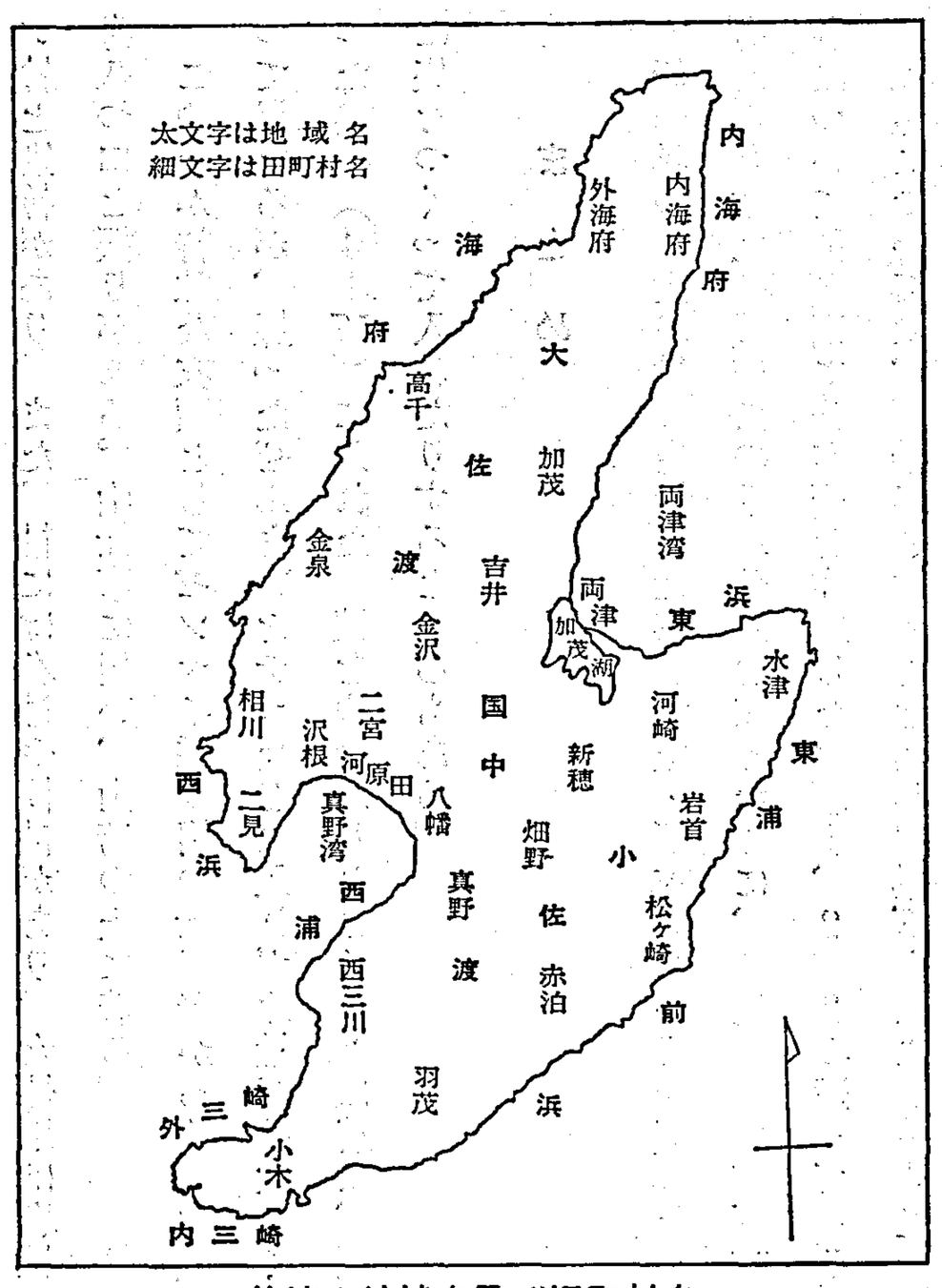
場の農村、山間部の山村とそれぞれの仕事着の型の特徴をもちつつ、南北にも大きく二分する型の差異がみられた。更に県北部と西蒲原の海岸部と魚沼地帯には特異な仕事着がみられた。

（山崎　光子）

## 二　佐渡の仕事着

佐渡は、新潟港から西へ約80kmの日本海上にある島である。面積は857km²、島の周囲は258kmあり、海岸線は起伏に富み、海岸段丘が発達している。

本州とほぼ平行に、北に大佐渡、南に小佐渡の山々が連なり、その間に国仲平野が広がっている。




佐渡の地域名及び旧町村名
（『新潟県史』資料集23より）

現在は、海岸線ぞいに島を一周する道路や、山間部を横断する道路が整備されたので、島の生活も均一化しつつあるが、かつては地形的な制約や歴史的要因から隣合った村であっても、異なった民俗伝承をもって生活していた。ことばや顔つきも村ごとに特色があると言われてきた。

佐渡において仕事着はヤマギと総称されるが、ヤマギはツヅレ、ゾンザ、サッコリ、サシコ、トウネ、カタビラ、アラギ、ハラコ、ジュバンなどと、形態・材質・地域によってさまざまな呼び方がある。

サッコリと呼んでいても、裂織りで作った仕事着ではなく、刺して作った仕事着であったり、裂織り、刺子の仕事着をドンザと呼んだり、呼び名と実態は一致しない。

仕事着の材質は、木綿がおもであるが、麻や藤、山苧などの自然繊維で織ったもの、古木綿を二、三枚重ねて刺したもの、古木綿を細く裂いて緯にして織った裂織りで作ったものなどがある。

佐渡の仕事着について、材質・使用方法、地域性などから、上衣を(1)ゾンザ、(2)サキオリ、(3)ひとえの三つに分けた。また、下衣は(4)モンペについて報告する。

この報告に使用した調査カードは、三二三枚、(1)一〇〇枚、(2)一五〇枚、(3)五〇枚、(4)二三枚である。

カード化した資料の所蔵は、

| | |
|---|---|
| 両津市郷土博物館 | 五枚 |
| 佐渡博物館 | 六枚 |
| 小木民俗博物館 | 六九枚 |
| 新穂村歴史民俗資料館 | 二枚 |